

新産業都市指定地区遺跡発掘  
調査報告書

昭和42年3月

福島県教育委員会

新産業都市指定地区遠跡発掘調査報告書

昭和42年3月

福島県教育委員会

新産業都市指定地区遺跡発掘  
調査報告書

昭和42年3月

福島県教育委員会

## 序

常磐・郡山地区が新産業都市の指定を受けて以来、各地で工場、住宅、道路建設などによる土地造成が急速にすすめられているが、この地域は本県でも特に遺跡の多いところであるため、当然、開発諸事業による遺跡の破壊が各地にみられるようになった。

このため、当教育委員会においては新産業都市指定地域における遺跡の分布調査を行ない、重要な遺跡については、史跡指定の措置を講じ、公益上やむを得ないものについては事前に発掘調査を行って記録保存をはかるなど、積極的な保存対策を講じてきた。

今年度は特に緊急に対策を要するいわき市平の夏井廃寺跡および郡山市富久山町の山王館の発掘調査を計画し、国庫補助事業として昭和41年8月、地元考古学研究者、地元教育委員会、県立高等学校職員生徒諸君などの協力を得て実施することができた。

この発掘調査は予期以上の成果をあげることができたが、本書はその報告として刊行したもので、学術、教育の資料として活用いただければ幸いである。

なお、この調査にあたり、ご協力いただいた調査員、関係市教育委員会、地元県立高等学校職員、生徒各位に深く感謝の意を表する次第である。

昭和42年3月

福島県教育委員会

教育長 折笠与四郎

## 目 次

### いわき市夏井廃寺第一次調査報告

第1章	序 言	1
第2章	遺跡の自然環境	2
第3章	調査経過	3
第4章	遺構	4
第5章	遺物	8
第6章	終 章	14

### 図 錄

### 郡山市山王館遺跡調査報告

第1章	緒 言	17
第2章	遺跡周辺の地形・環境	18
第3章	調査経過	20
第4章	遺跡の調査	24
第5章	遺物の調査	28
第6章	考 察	30

### 図 錄

# いわき市夏井廃寺第一次調査報告

## 第1章 序 言

### 1. 調査の目的

新産業都市指定にともなう町村合併の結果、33万の人口を有する「いわき市」の誕生となって、種々の発展が予想されている。

平地区藤間の新舞子海岸と下大越の大乗塔（だいじょうとう）の丘陵とを結んで、観光施設の充実・拡張計画が発表されているのもその一つである。

これが実際に移されると両地区の間にある夏井廃寺の遺跡（福島県遺跡地名表125）は、破壊・損傷が予測される。

さらに、本遺跡の一部は県指定史跡「夏井廃寺塔跡」となっており、指定解説には、一段の造り出しある礎石を、塔心礎としている。

これがはたして心礎であるか、また、塔跡であるかは、現段階において再吟味しなければならなくなっている。この点については、さいわいにして、「夏井廃寺跡」の呼称（本概報ではしばらく通称に従うが）の問題とあわせて、県文化財専門委員の岩越二郎氏が論じておられるので、重複を避けたい。磐城史談第3巻1号（昭30）「下大越廃寺跡」を参照されたい。

夏井廃寺は調査の時点では、はたして遺構が現畠地や水田中に遺存しているかどうか危ぶまれたが、とにかく以前の礎石の出土状況、布目瓦の所有者の調査等を含めて調査することとした。

本概報は発表後5ヶ月にして執筆せねばならない状態であるので、数千枚におよぶ瓦の整理も不十分であり、十分な検討と研究の時間的余裕がなかった。正式の報告は今後予想される継続調査の結果を待っていたいだきたいと思う。第二次調査の結果は從ってここに述べる段階にいたらないことを、ことわっておきたい。

### 2. 既往の研究

江戸末期の鍋田三善の「磐城志」に、「其古瓦を出す處、長者平を距ること凡三町余、耕土中一小区の荒地にあり（南北九間東西六間許字を白山前石田云）此所に缺瓦累々として散在す。好古者拾い尽して文字あるは甚稀也。又此区に大なる蕉礎四つ五つ確乎たるを以て見れば、古昔堂塔の遺址に疑いなかるべし。尤も同様せ焼瓦と見えたり。」とある。

明治以後のいくつかの関係する文は、いづれもこの「磐城志」を参考にして述べられており、独自の所論をみることはできない。

しかしながら昭和30年に発表された岩越二郎氏の前記論文には、今までの研究のまとめと疑問と氏の意見が発表されており、本遺跡の理解には是非必要なものと思われる。研究者の中には、長者平と本遺跡を混同しているものや、「磐城志」のごとく堂塔の記事が長く先入観として今日まで世人に信じられている点は、よくよく考えねばならぬことといえよう。

### 3. 周辺の遺跡

本遺跡の南数百米の台地上（第1図の1の数字のある所）に通称長者平と呼ぶ、平坦部と緩斜面がある。近くの人の話によれば、ここからも布目瓦が出、礎石があり、壇の焼けたもの（スクモ）が出土するという。しかし現在では礎石は表面観察では不明である。

布目瓦はわずかに表採できる。この長者平のわきの斜面には縄文期の貝塚もある。

第1図2は国史跡指定の大円墳「甲塚」(かぶとづか)である。その西側の鳥居は大国魂神社で、式内社である。3の遺跡は台地平坦地で、県指定史跡の高久古館である。鉄釘も発見され、近くの堤を金子(かなこ)堤といふ。4は国重要文化財指定の天冠埴輪が出土した地点であり、数多くの古墳群があり、4の番号のところには数十の横穴墳がある。この地図の豈間の「間」の字の附近にも埴輪を伴う古墳がある。また古墳群や横穴群も他に多く存在し、1の番号のすぐ下の屋根にも、「千五穴」と通称される横穴群がある。ここには全ての遺跡を図示できない程、いわき地方でも最も多くの古墳文化期の遺跡の所在するのが第1図に示された地域であるといえよう。

なお、本道跡の布目瓦はどこで焼かれたものか、いま廻跡は発見されていない。北西部の普波の字東作に瓦の焼いた跡があるというが、現在確認されていない。

土師器の分布もかなり多く、2の番号のすぐ上にある地点の山崎の小茶園からは、小茶園期と名づけた私達が編年に用いる標式遺跡がある。

実年代を奈良時代後半に比定しているので本道跡と関係してみると興味深い。

その他、普波、砂畠地帯、清水、原、八幡、神谷作と丘陵下の砂丘上には、連続して濃密な土師器の分布があり、神谷作からは墨書き土師器が出ていている。



第1図表 遺跡地図 (夏井廃寺は1の●)

## 第2章 遺跡の自然環境

阿武隈山地南東縁に統いて、第三紀層からなる丘陵地と、それより低い台地・沖積低地がある。第1図にみえる西から東にのびる丘陵地は、湯本丘陵の一部で、80m～200mの高度をもち、夏井川と斎川の間に広がっている。

海岸は沼之内と四倉を結んで、ゆるやかな弧をえがき、そのほぼ中央部で夏井川が海に注ぐ。

## 夏井廃寺

沖積低地は、四倉・平海岸平野を形成しており、数列の浜堤群が発達している。夏井廃寺附近では次のような浜堤を見出すことができる。すなわち現海岸線とその内側に2列の浜堤が存し、下大越の県道とその浜堤間に直角に一列の浜堤がある。最も内側にあるのは、遺跡附近の根掘り部落から下大越と上大越の間まで県道に沿って存する。

夏井廃寺は、この4列の浜堤のさらに内陸側で、白山神社参道や江戸時代につくられた愛谷江筋の通る、字石田に存する。この字名は、昔礎石が多数存するのに因んで名付けられたものと思われる。

地盤は表土層の下に砂まじりのシルト層があり、砂層が統いて、地下数米で砂岩の基盤となる。

現在は遺跡の大部分が水田であり、県の史跡指定地区と今日調査したA地区・B地区のみが畑である。しかしこれらの水田も第二次大戦後戻であったのを、表土をとめて水田とした地区がかなりある。県の指定地区と現在の畑とは1.7m前後の標高差があり、指定地区的平坦面に存する礎石は、往古のままであるのが、動いているのか興味を引く。このように周囲より1.7mも高いところに礎石があるのをどう理解するかは、一にこの礎石下の断面を調査することによって解決すると思われる。

夏井廃寺は海拔約5m程である。

1. 発掘地点 A地区
2. 発掘地点 B地区
3. 県指定史跡夏井廃寺塔址
4. 白山神社参道



第2図表 夏井廃寺遺跡地形図

## 第3章 調査経過

### 1. 調査組織

調査主体 福島県教育委員会

実施機関 平市教育委員会

調査期日 昭和41年8月1日より昭和41年8月6日まで

発掘担当者 渡辺一雄

調査員 渡辺誠、鈴木重美、松本友之、馬目順一、菅原文也、岩越二郎、渡部晴雄、鈴木市郎  
(順不同)

## 2. 調査日誌

地元関係打合会・事前調査等は省略した。

### 8月1日 晴

各員9時に現場集合し、10時すぎ鍵入式後、たゞちにA地区にトレンチを設定。周囲が水田の中の細長い畠で、耕土の空地がないので、 $1.5m \times 30m$ のトレンチを10区にわけ、偶数区に耕土を盛ることとする。

午後、渡辺行男氏の案内で、地元の瓦所蔵者、礎石所有者を訪問し、写真をとり、ついで長者平へ登って現状をみる。やはり長者平からも布目瓦出土していることが明らかとなる。

### 8月2日 晴

昨夜のうちにトレンチ内に周囲の水田から溝水し、排水後作業せねばならぬ。

瓦がばつばつ出土し、須恵破片、楕、糸切底の土師片、青磁片等が出る。さらに各区から柱穴の存在が明確になる。柱穴の周囲や周囲や底部からも瓦片が発見され、注意深く作業進める。小林直長氏宅の軒丸瓦と角瓦を見る。書きあり貴重。

午後3時より $15m \times 12m$ のトレンチをB地区に設ける。畠地はA・B両地区のみで、あとは全部一段低い水田である。B地区は表土層より大半多くの瓦片出土する。

### 8月3日 雨模様

A地区は排水、整理後実測を行なう。

B地区は昨日の東側のトレンチに対し平行に西側に $1.5m \times 12m$ のトレンチを設ける。両トレンチ内より、それぞれ1個の礎石を発見、礎石の上縁周囲に瓦片多数埋めてあるようだ。

### 8月4日 晴

B地区両トレンチの北端より瓦群出土。東西両トレンチの中間にさらに $1.5m \times 6m$ のトレンチを設ける。重点を瓦群の追跡と土層の層序関係におく。

A地区は午前中に埋めもどし完了。

### 8月5日 晴

瓦群を追うが粘土質土層でなかなか進捗しない。それでも軒丸瓦、文字瓦の発見が続々、活気出る。測量関係は全般調査を前半市職員の方が行なったが完了したのでB地区の平面、断面実測を急ぐ。

### 8月6日 晴

今夏の調査期間中最も暑い。

午前中大きい礎石の下を掘り根石の有無及び土層をみると。畠の北縁部の瓦群は東端で東側の水田中にのびることが判明したが、稲成育中なので、次回にまつこととする。

午前中、礎石と瓦群の部分以外を埋めもどし完了。午後から瓦取り上げ。完全な軒丸瓦、未知の文字瓦等を発見。

午後5時、一切の現地での後仕事は無事完了する。

## 第4章 遺構

### A 地区

県指定地区の東北部 $70m$ の所にある微高地は、東西に細長い畠となっている。

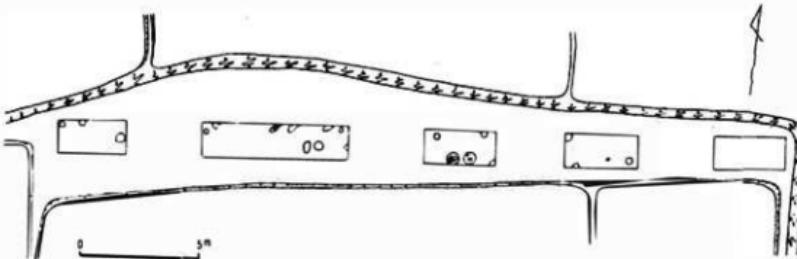
この畠の中央部に南北 $1.5m$ 東西 $30m$ のトレンチを設け、さらに $1.5m \times 3m$ ずつ10区に区切り、東から1区2区と名づける。発掘は1区、3区、5区、7、8区、10区のみおこない、他は耕土を盛る部分にあてた。

各区でわずかの差はあるが、ほぼ平均に層位は連なるので、ここでは最も良好な結果を示した7、8区に

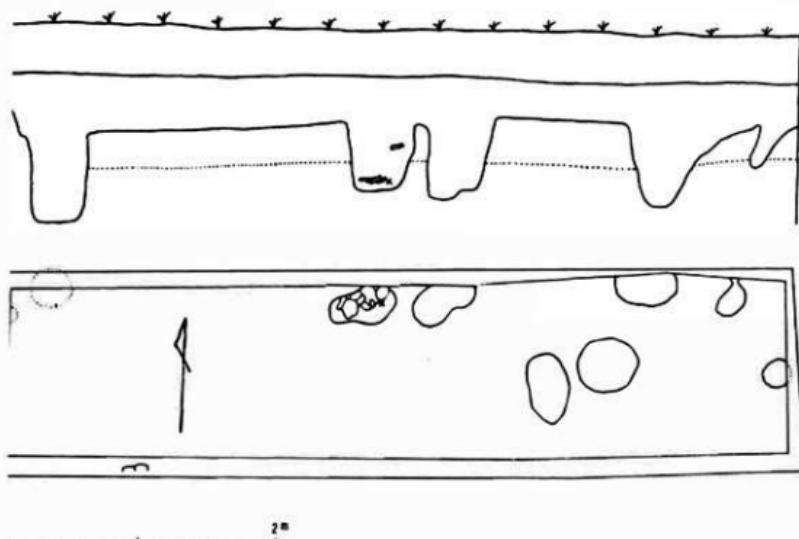
いて説明する。一番上層は耕作表土層で約40cmの深さがある。その下に約30cmの厚さの黒色土層がある。その二層のつぎに粘土混りの褐色土層と、砂、粘土混り褐色土層がある。柱穴内にはいずれも黒色土層が落込み、粘土混り褐色土層を切り込んだことがわかる。また柱穴内にはなぜか砂の混入が認められた。

7・8区では10個の柱穴が確認された。7区4Pでは柱穴内より「依」の文字の存する瓦が発見され、82Pでは「福・吉・昌・峰」の文字瓦が柱穴底より発見された。8区1Pでは瓦が底や柱穴側面より発見されているが、土築も同時に発見された。7区6Pは明らかに二つの柱穴を切り合っており、建て替えたことを示している。柱穴の深さはどれも約50cm程度である。

発掘区での柱穴は、3区3個、5区4個、7・8区10個、10区で3個、計20個が発見された。柱穴を切りっているものは3個であった。柱穴径は大きいもので40cm以上、30cm内外が普通であった。



3図表 A地区平面図



第4図表 A地区 7.8区 平面及び北壁断面図

時期的にも全ての柱穴が一時期のものでないことは今までの説明でも理解できよう。しかしこれらの柱穴が建造物なのか、櫻列のようなものかはわからない。7区でみると柱穴がほぼ東西に走っていることはやはり注意しなければならないだろう。今回未発掘に終った、2・4・6・9・10区についても調査を進めればより明らかな事実が判明すると思われる。

なお、瓦片は柱穴内と褐色土層上面から出土し、灰釉の須恵質土器片も瓦片に混じって出土した。

## B 地 区

A地区も畑であるが、B地区も長方形の畑である。しかも周囲に畑はこの二箇所のみで、あとは全て水田である。B地区的東隣りの水田も、畠だったのを水田にする為除土した時、礎石が4個発見されたというので、この畠を選び、先ず東側の水田に近い所に  $1.5m \times 12m$  のATを設けた。それを4等分し南側より1区とし4区までを設定、表土層40cm下に1

・2区で礎石が発見されたので、ATを拡げ5・6区を設定。ついでBTを西側にATと同じ大きさに設け、1区より礎石を発見。さらにBTの3区4区の東隣にCTを  $1.5m \times 6m$  設けた。

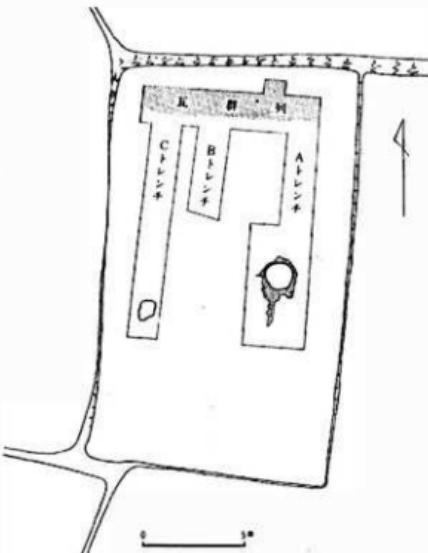
B地区より発見された礎石は結局2個のみであったが、ATの礎石はBTの礎石よりも表面において20cm低いことがわかった。ATの礎石は確實なものであるので、BTの礎石は浮いている感じが強い。ATの礎石は経  $1.2m$  の砂岩で、表面は扁平で周囲を円形に荒く整形している。BTのは花崗岩である。

ATの礎石は周囲に瓦片や石をつめてあるが、下まではいかず脇部のみに止っている。その瓦は南側でやや列をしていて、中から竹管文を用いた珍しい軒平瓦（文字もある）が発見され、さらに瓦片に混じって糸切土師杯片が発見された。根石はいずれもみられないが、AT礎石表面より  $-10cm$  までは粘土を含んだ黒土層で、それ以下

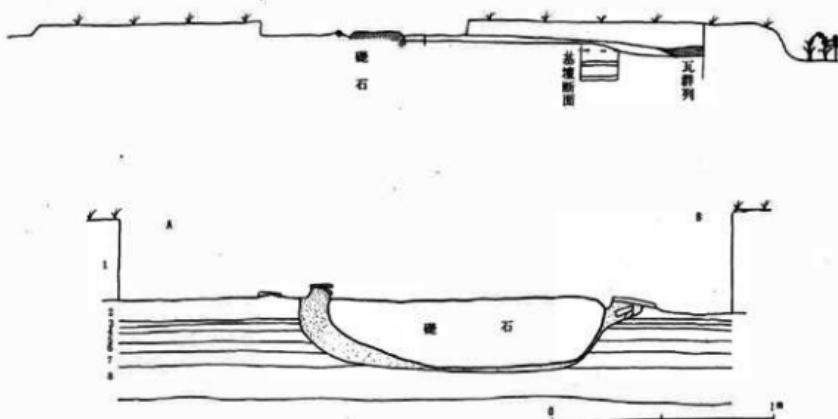
は、砂岩片+粘土の黄土層と砂岩片+粘土+黑色土層の層が瓦層となって続く。これは基壇の盛土と考えている。しかしBTの礎石断面では40cmの表土層下に固い層がある。粘土を含む赤褐色土層であるが、ATのような瓦層はない。これが約40cm内外の深さあり、地表面下80cmから黑色土層となる。この第二層の赤褐色土層を基壇と考えている。

第6図表にAT西壁の断面図を示しておいたが、3・4区の部分を深くピットを設けてみると、ここでは上部黑色土層が北側へ低く傾斜しており、黄色と黒色の瓦層が8層にわたって存在し、1.5m位の深さとなる。なお  $-110cm$  から時期不明の土師杯片が出土している。当時の地表面と考えられる固い土層は、4区ではいちじるしく低くなり、4区北側でその上に瓦群が存在している。

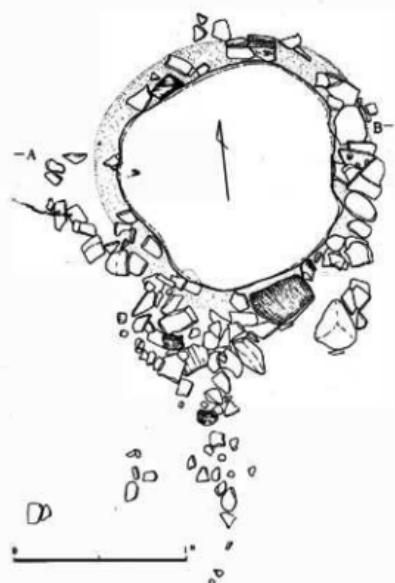
以上の事から考えるとこの瓦層は、深さ、レベルの不一致等まだ基壇の状態は解明され難いといえよう。



第5図表 B地区平面図



第7図表 B地区 Aトレンチ礎石断面図（1. 表土層、2. 4. 6. 8 粘土質黑色土層、3. 5. 7 粘土層）



第8図表 B地区 Aトレンチ礎石平面図

最後に、B地区北側に発見された瓦群列について記すこととしよう。この瓦群列は東西方向に巾約2m内外、CTの西側40cm位の所よりATの東側までずっと続き、さらに隣りの水田までのびてることがボーリングの結果わかっている。北側の畠の端からは一段低い水田があるので、全部にわたって北側の瓦群列を追うことはできなかつたが、殆んど北端に近い所まで瓦はある様である。第6図表をみればよく理解できよう。瓦の堆積も南側は薄く北側は厚いが、これは緩やかな斜面に堆積したからだと考えている。

この瓦群列中の瓦は、もちろん平瓦が圧倒的多数を占めるが、その中から文字瓦が幾点か発見された。又軒丸瓦、土師器片、鉄釘等も見出されている。しかし軒平瓦はほとんど三重弧文であり、軒丸瓦も割合に新しいものばかりで平安初期にまで下ると思われるものが大部分を占めている。

## 第5章 遺 物

今回の調査で発見された遺物の大部分は、古瓦で大型ダンボール箱約十個位である。正確な数量等は今後の整理が必要である。他の遺物として、鉄釘を中心とする金属製品と、完全なものは全く出土しなかったが、土師器、須恵器の土器片と、物のある土器等があった。

### 1. 鉄 製 品 (第15図版、第9・10図表)

鉄釘 破片で5個以上あるが、そのほとんどに錆によるふくれがみられる。推定長さ8cm位のもので、断面はいずれも長方形であって、どこかで曲ってしまっ

ているものが目立つ。A地区、B地区ともに出土しており、柱穴の存するA地区にも何らかの釘を使用した構造物があったものと思われる。

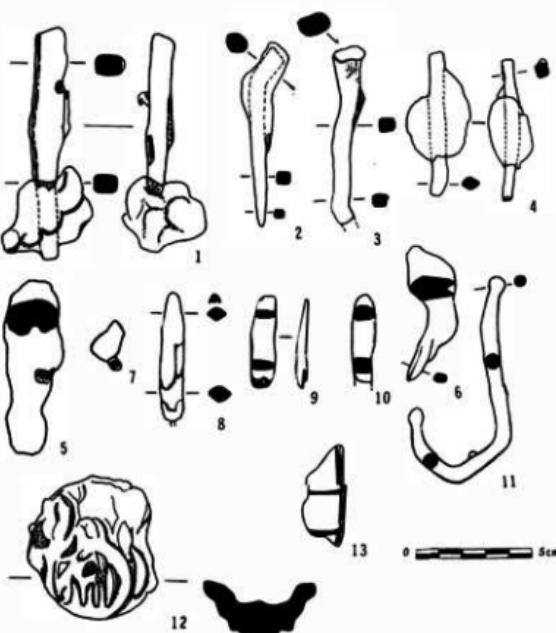
その他の鉄製品 鉄錐と思われるもの、釣針様のもの、刀子片らしきものがある。それに円型の施具のようなものがあるが、何か釘かくしのようなものであろうか。

### 2. 青 銅 片 (第15図版、第9・10図表13)

うすい小さな破片である。何かの製品の破片であろうが、不明である。瓦群列の中より発見されたものである。

第10図表 金 属 製 造 物 一 覧

第9図表 番 号	品 名	描 要	出 土 地 点
1	鉄 釘	先端部錆している。釘頭完全に残る。断面長方形。	B 地 区 A T 4-C T 4 拉張区
2	"	比較的上半分は錆も少なく、よく残っている。釘頭の方で曲がり、現長 7.9cm、断面長方形。	A 地 区 A T 4 西壁

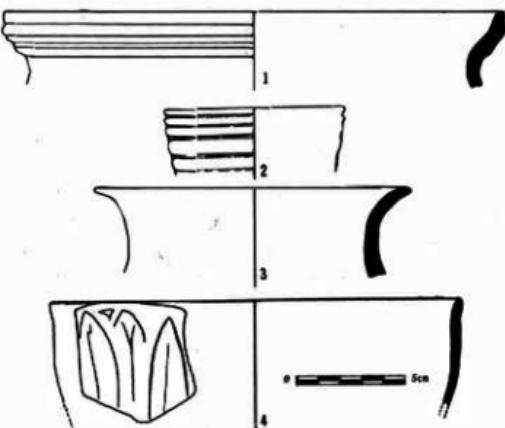


第9図表 金 属 製 造 物

第9回表 番号	品名	摘要	出土地点
3	鉄釘	釘頭や曲っているが残っている。先端が折れている。半分位に劈がある。	B地区 中央部
4	"	錆化いちじるしく、ふくれてしまい、原形を失なっている。両端とも失なわれている。	A地区 1T
5	不明品	全面錆化し、何であるかわからない。 鉄製品。	B地区 AT
6	鉄釘	全面錆化しているが先端部残り、断面長方形をなすので釘であろう。	"
7	"	やはり錆化がすんでいるが、一部原形の残る所をみると長方形の断面であり、釘であろう。	"
8	鉄針	断面菱形をなし、先端部はやや細目になっている。一方には折れ口が残る。	B地区 AT 磐石駅
9	鉄製刀子片	扁平で断面をみると、片側は細くなっている。刀子片か?	B地区 AT 4~CT 4 瓦群列北側
10	鉄釘	断面長方形で、錆によるふくれは、ほとんどない。	B地区 CT 4
11	釣針様 鉄製品	全体に錆によるふくれはなく、形状は釣針様であるが裏して釣針かどうか不明。 両先端部には明らかにくびれがあり、ふところの腰には、いは状凸起がある。断面は丸い。	B地区 瓦群列内
12	不明品	鉄製で、何かの金具であろうが、用途は何かの被せ金具か? なお焼酎したい。表面いくつかの隆起部があり、裏は凹んでいる。	B地区 AT-4 表土より-100cm
13	"	折れ口明灰色をなし、片側折り曲げてある。 極めて薄く青銅であろうと思われる。	A地区 7T

## 3. 土器類(第15回図版・第11~13回表)

土器器 いずれも細片で、原形の半分をとどめるものすらない。今まで数多くの人がこの遺跡の表面採集をおこなっているが、瓦に目をひかれるのか、土器片等を採集した話しをきかない。瓦とともに時代決定の有力な遺物となるので、細片ではあるが記すこととする。内黒のものが多く、そうでないものもある。器型も小片のため不明だが、浅鉢か碗のように思われる。口縁はや、外反気味のもの、ゆるく内反するもの等がある。厚さは2mm~4mmで、極めて薄いものばかりである。底部は無文、木葉文、糸切りとわかれ、中に無文底の周間に一本の沈線が走るものがある。



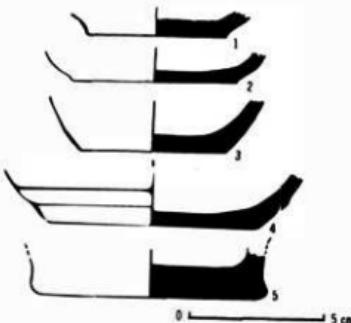
第11回表 土器類口縁部

その中にあって、1個のみ古式土師の系統を引くと思われるものがある。壺の口縁部で、大きく外側へ反りかえる。褐色を呈する。（第12図表）

須恵器 土師器よりさらに小数の破片で、自然釉や釉のかつたものが多い。かなり時代の下ったものが多いようである。

釉には灰釉や淡紫色が帯状に走るもの等がある。

頭部にくびれがあり、そこに一本の高い隆線のあるものがあって、壺のような器型を示すが、他はすべて器型不明である。



第12図表 土器底部

○は土師、◎は須恵及び須恵質

第13図表 土器類一覧

出土地点	部 位				特 要	第11・12 図表番号
	口縁	頸部	胴部	底部		
B地区 AT-4	○				口縁や、外反、上方で2mmの厚さ、内黒。	
B地区 CT-4				○	底は無文。底部にちょっと台があり。大きく開く胴部となる。	12-2
B地区 AT4～CT4拡張区				○	内黒である。器面荒れている。底は無文。	12-3
B地区 AT4	○	○			口縁部破片は4mmの厚さでや、外反。内黒である。胴部片はや、厚い。	
B地区 AT表土			○	○	底部片は糞切底である。 済患は小片。	12-1
B地区 AT礫石付近	○			○	極めて薄い口縁で、ゆるく内反。 底部は小片。	
A地区 10T	○				土師口縁細片、極めて薄く、や、外反。	
B地区 AT				○	内黒土師底部、底部周囲と胴部下端にそれぞれ1本ずつの沈線走る。	
B地区 AT4～CT4		○			ぐの字に曲る部分に一本の隆起帶走る。内側に灰釉、表にも釉ある。	
B地区 AT4	○				瓦群列の下地表下-145cmより出土。新しい土師に属する。	11-1
同 上	○				同地点であるが、これは古い方に属する。 大きく外反する口縁で壺であろう。	4-3
B地区 AT礫石の瓦列下	○			○	口縁片は内黒で新しい土師器である。 底部も段を有する胴と糞切底で、新しい。	11-2-4
A地区 1T			○		釉あり。 細い堅型痕ある。	
B地区 CT-4			○		釉あり。	
A地区 7T			○		灰釉の上に淡紫色帯状の釉がある。	
B地区 DT				○	や、厚く、底部角や、出ている。 木葉底。	12-5
A地区 8T	○				青磁口縁、刻葉の文様がある。中央に低い棱がみえる。	11-4

注 他に数地点より土師片、須恵片(釉あり)出土しているが、全て細片のみなので略した。

青磁片 予想しなかったものに青磁片と思われるものがある。柱穴のあるA地区の8区よりの出土品で、口縁は土師と同じようにやや外反し、器厚は4mmである。復原口径19cmを数える。おそらく浅鉢型をなすものと思われる。劍葉状の模様があり、葉脈にあたる部分の中央にわざかに棱があつて、手触りでもそれがわかる。

#### 4. 土 錘 (第15図版・第14図表)

土器以外の土製品としては、土錘が2個ある。完全な方はA地区の8区内にあるピットから出土したもので、明褐色のきれいな器腹をしている。口径は広い方が5mm、狭い方が4mmである。細長い紡錘形をなす。

半欠品は縦に真中より割れたもので、口径7mmで明褐色をなし、表面はややざらざらしている。出土地点はA地区の1区である。

#### 5. 穀類炭化物

ごく小量の穀類炭化物がA地区7区から出ているが、同定を得てないので種別不明。

#### 6. 古 瓦

軒丸瓦 今回出土の多くの布目瓦の中には、軒丸瓦は以外と数が多く、全部で4個のみである。

完全なものが1個出土しているが、瓦当面文様部分は二つに割れている。文様部分の径は16.5cmで、四葉複弁蓮華文である。中房は小さい方で蓮子なく、弁先端部の立上りの表現も、全く始めの形態を失い、複弁の界線の条による表現等かなり蓮弁の意義がすたれています。周縁は狭く、あまり高くない。条線印文がこの周縁と中房にみられる。

丸瓦の表面は、両側に格子目文がみられ、裏の布目痕は、筋通るが荒い。全長33.5cmで、出土地点はB地区の瓦群列の東端部の北側である。(第9図版・1.2.5)

これと全く同じもの、同範のものが1個出ている。二つに割れた部分は共に瓦群列より発見されているが、約8cm程離れたところから別々に出土したものである。(第9図版・6)

つぎに周縁の外径が前と同じく16.5cmで、範の異なるものがある。これも丸瓦の部分を失ない、二つに割れている。割れ方も前の二つと同じ位置、すなわち丸瓦の部分と接続する所から折れている。

厚みも前の二つが、2.5cmであるのに対して、これは4cmである。

一見八葉にみえるが、これは四葉複弁蓮華文で、間弁の部分が大きくなっているために、間違いややすい。これは第7図版6の鈴木花慶氏蔵のものと比較するとよくわかる。中房径3cmで、子房は4顆あるが、はつきりしているのは1つだけである。周縁低く粗末で文様はない。(第9図版・4)

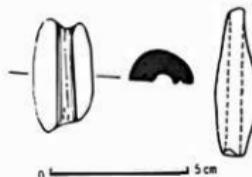
以上三つとも堅質で灰色を呈す。

最後の1つは瓦当面で半分以上を失なっている。推定径約20cmである。中房径4.5cmで、蓮子は極めて小さいものが複数程度に残るのみなので、何顆あるかわからないが、十顆前後と思われる。鈴木氏蔵の同範と思われるものは不規則にならんで12顆ある。

八葉複弁蓮華文で、複弁先端部の立上りは強く、小葉は細長い。周縁は広高で、竹管文を押している。他に蓮子の表現に竹管文を用いているのが知られている。

周縁部の厚さは5cm強で、丸瓦の接続する部分がとれてるので印籠つぎの跡がよく見える。前の三つよりも軟質で、褐色である。

出土地点は大きな礎石と瓦群列の中間、Cトレンチで、礎石とほぼ同じレベルから発見された。(第9図版・3)



第14図表 土 錘

軒平瓦 種類は多くない。一番多いのは三重弧文で、かなり重厚である。

特異なものとして、B地区の礎石の周囲の瓦群の中より発見された軒平瓦がある。幅約30mm、表面は焼成の時のひび割れがみられ、布目底のうえを荒い刷毛目で整形してある。

正面には竹管文を点列し、その上と下を二本の沈線が走る。さらに額にも沈線による斜格子文の区割の中に竹管文を一つづつ配してあるが、双葉、郡山の五番廃寺出土のものにこの手法は酷似することに気付くだろう。またこの額に統いて裏面には墨書きによる文字と思われるものがあるが読めない。(第9図版・3)

三番目に小破片で、A地区5Tのピット内から出土した有頸軒平瓦の頸の部分だけが発見されている。

(第11図版・4)

小片のため、文様もよくわからないが、正面に墨による沈線で雲形文様の一部が残されており、額面にも墨書きによる斜格子文と思われるものがみえる。

丸瓦 図版にみると無文のもの格子文のものその他普通にみられるものが多い。ただ丸瓦の中にや、角のある、例えば先端に文字のあるもので五つの面をなすものが幾つかみられ、角瓦とも称すべきものがあるが、普通の丸瓦と同様に用いたものか、棟のような所に用いたものか知らない。

平瓦 いざこも同じであり、当然ではあるが、断然数が多いのは平瓦である。これも大きさ、色、焼成、胎土、布目底、文様、重さ等大変種類が多いのであるが、未整理も多いので、こ、では図版に示したものにとどめる。

以上主として、発掘品を中心に述べてきたが、図版の中には、遺跡地近隣のはうぼうで所蔵されているもの、本遺跡とや、離れている。前述の長者平遺跡出土をも示したので、第16図版に簡単に記しておいた。



第15図版 押型文字のある角瓦?

第16図版 瓦 図版 解説

図版	番号	文様種類	摘要	出土地	所蔵者
第 七 図 版	1	六葉複弁蓮華文軒丸瓦	僧帽磨き、北茨城市唐堀山のものとはほとんど同じ。	長者平?	鈴木花慶
	2	六葉複弁蓮華文軒丸瓦	蓮子の数は六葉のものは7つである。	長者平	渡辺才兵
	3	四葉複弁蓮華文軒丸瓦	周縁の逃路齒文は1、2に比して間隔している。	石田?	鈴木花慶
	4	同 上	3に比し周縁部に整形時のまくれが大きい。	長者平	渡辺才兵
	5	八葉複弁蓮華文軒丸瓦	広高圓頭で、そこに竹管文を蓮子と同じ12個押す。	白山神社鳥居附近	鈴木花慶
	6	四葉複弁蓮華文軒丸瓦	蓮弁も中房も周縁も大部分くずれている。	石田	#
第 八 図 版	1	八葉複弁蓮華文軒丸瓦	第7図版5、第8図版2と同じ類のものと思われる。	長者平	渡辺才兵
	2	同 上	第7図版5、第8図版1と同じ類のもの。	石田?	渡辺行男
	3	五葉複弁蓮華文権先瓦	中央の穴が用途を示す。文様くずれる。	石田?	鈴木花慶
	4	軒 平 瓦	独特の模様をもっている。好間から似たものが出たという。	石田?	同上

回版	番号	文様種類	摘要	出土地	所蔵者
回版	5	軒平瓦	大きな波状文の文様が正面にある。	長者平	鈴木花慶
	6	文字瓦	瓦の種類は不明である。「二田」にみえるが「三田」が正しい。	石田?	同上
	7	同上	「佐」と読むのであろう。	石田?	同上
	8	同上	「吉・昌・福・鳩」の文字、左文字である。	石田?	同上
	9 10	角瓦(文字瓦)	この部分に文字があるのは、第13回版7と同じ。	石田	小林直長
第九回版	1, 2	四葉複弁蓮華文軒丸瓦	丸瓦と軒丸瓦の接合部や、钝角気味。	石田	発掘品
	3	八葉複弁蓮華文軒丸瓦	前の八葉のものと同じであろうが、子房の周がやや隆起している。		
	4	四葉複弁蓮華文軒丸瓦	第7回版6と同じ類子房の外側を騎ませている。		
	5	四葉複弁蓮華文軒丸瓦	1, 2と同一のものである。		
	6	四葉複弁蓮華文軒丸瓦	5と同様であることにまちがいはない。問弁退化。		
	1	三重弧文軒平瓦	焼成や、鉄調。		
第十回版	2	同上	右側をみるとつなぎ方がよくわかる。	石田	発掘品
	3	軒平瓦(文字瓦)	竹管文と上、下に沈線をおく文様正面にあり、頸にも文様。		
	4	三重弧文軒平瓦	数が多い軒平瓦はこの類のものである。		
	1	平瓦(文字瓦)	「吉・昌・福・鳩」の文字瓦は全面に押型するのが特徴。	石田	発掘品
第十一回版	2	丸瓦	表は刷毛目で、裏は布目である。		
	3	同上	表は線印文で裏は布目、整型の刷毛目も横に走る。		
	4	軒平瓦	頸にも沈線の文様ある。正面には沈線で唐草文?		
	1 2 3	平瓦	1のように表が整型の刷毛目があって布目のみえない部分が多いのもある。	石田	発掘品

注 「石田」とあるのは夏井廃寺地内の小字名である。  
 「長者平」はそれより数百メートルはなれた山の上の平坦部。

文字瓦 今回の調査によって、新たに幾つかの新しい文字瓦が発見されたのは大きな収穫の一つであった。一部未整理の瓦もあるので今後も新たなもののが発見される可能性もあるが、その大方のものはここに発表できた。

大別すれば押型文によるものと荒書きのものとの二つで、平瓦の表、裏、丸瓦の裏、軒平瓦の裏側に文字が見える。

中でも多いのは例の「福・鳩・吉・昌」の四文字を単位とする左文字の押型文字瓦で、全面に叩きこんだ丸瓦(実際は角であるが)が発見されている。この文字瓦はA地区・B地区ともに発見されており、数十点の破片が発見されている。「三田」の文字瓦はシンメトリーの文字なので、左文字になっているかどうか検討をするが数点発見されている。これは全面に押してあるのではなく、瓦の一部に点々と押してあるのが前者と異なる所である。

荒書き文字の中には、調査開始当時知られなかったものが発見されている。「子東人」とか「里松」とか「小止」(こう読むかどうか要検討)等である。いずれも人名であろうが、それが瓦工のものか、寄進者

の名を記したものかは本報告で詳しく述べるつもりでいるので、ここでは論じないことをしたい。

冬の第二次調査でも新しい重要な文字瓦の発見があったので、文字瓦の持つ資料的価値は見逃し得ないものがある。

## 第6章 終 章

### — 調査結果と今後の継続調査の必要性 —

夏井廃寺の全貌を知るには、これからも何回かの調査をおこなう必要があることは、言を俟たないことであるが、ここには第一次調査の結果から考えられるいくつかの問題を提出しておきたい。

夏井廃寺の寺域は、現場を実測した結果からは判明できなかった。しかし遺跡中に有する二箇所の畠地（今回調査のA、B地区）がいずれも遺構を残していることを知り得たことは今後の調査に明かるい見通しを立て得る。またボーリングによって水田中にも確実に瓦列が有することを確かめ得たが、これまた危ぶまれた水田中の調査も可能であることを示してくれた。

夏井廃寺の調査は、単にこの遺跡の存する字石田地内のみに終わっては十分にその性格を究明できないと思う。なぜならこゝから数百メートル離れた長者平の礎石・古瓦の出土をどう考えるか。決して寺と無関係ではないからである。当然長者平の性格が解明されなければならない。都家・駅等の比定が考えられるが、考古学的調査を行なうことによって明らかにされる部分も少なくなるだろう。文献の整理・研究の結果と相俟って、長者平遺跡と夏井廃寺の関係を認識しようとする時に始めて夏井廃寺の意味は明らかとなる。

同じことはさらに石田地内に存する「白山神社」を考えることによっても言える。故に代義定氏はこのことに気付かれて、白山信仰との関係を研究する必要をとられた由である。白山神社の縁起・由来・経過を調査することにより、本地重説による天台宗との関係が明かるみにでるであろう。

夏井川の北側にある草野の六十枚部落にも例の四文字を残す布目瓦が出土する由であるが、これは窟跡でなく、同地に白山神社と関係を有する小祠が存したということであるので、この点も今後調べなければなるまい。

第一次調査A地区からは、土器師・青磁片・鉄片等と多くの布目瓦を出土した。また二十個の柱穴を検出し、柱穴の底部や周囲に布目瓦が存することにより、その布目瓦が「吉・昌・福・嶋」の文字を含んだもの等、B地区と同じものがあることより、少なくともこの柱穴に存した柱は、これらの古瓦を利用したことから、それらと同時期か、より新しい時期のものであろうと思われる。ほんとうに走るこの柱穴は畠の方向とも一致するし、そのA地区の北側からは一段低い水田となること等、当時の地相をそのままに残す疑いが大きい。しかしこの柱穴群が、どのような建造物であるかは、A地区の南の水田をも調査し終えなければ、いえないことである。

B地区からは二箇所の礎石と、瓦群列を検出した。瓦群列は、畠の縁の縦に平行に、東西方向に並び、瓦溜まりではなさそうであった。また礎石の下には根石がなく、数段にわたって土壇を設けていることが明らかとなつた。

のことから、土壇を設けた上に礎石をおき、瓦葺きの屋根をもつた建造物の存在を推定し得る。しかし



第17図表 へら書き文字のある平瓦

礎石の数・土壇の括り等を調査するには、今回の調査は小面積のため不十分であり、東と南側の水田下をも調べなければその規模を明らかにすることはできないのであって、この点からも継続調査の必要性を痛感する。

つぎに古瓦の種類についても從前知られていたものの資料を倍加することができたのは今回の調査の一つの収穫であった。地元民の中に所蔵している、古瓦をも丹念に調査した結果、貴重な軒丸瓦や文字瓦を見出した。(図版解説の項参照)発掘資料でも好資料を得たが、それらの一つ一つについての意義を述べる紙数がないので、本報告にゆすることにしたいが、それでも一、二について項目的に述べたい。

- (1) 文字瓦の中の「子東人」・「里松」等の人名を表わすものや「○依」・「吉・鶴・昌・福」の如く地名を表わし得る可能性を有するものがある。
- (2) B地区より出土した軒丸瓦の中には奈良後期から平安前期にかかるものが多いとみられることがわかった。とかく今まで奈良前期の美しい軒丸瓦に眩惑され勝ちであったのを修正し得た。
- (3) 全面積に比すれば今回の調査区域は極めて狭い範囲であった。しかも水田中にも遺構が存することが確認された現在、継続調査が絶対不可欠なものとなつた。

#### 【付 記】

今回の調査に当っては、地元各位・市内各高校クラブ員の御協力をいただき、かつお世話になった。氏名を記して感謝の意を表する。

地元(鈴木花慶、渡辺善保、渡辺行男、鈴木泰、小林直長、渡辺才兵)研究者(永山亘、木田一)また、市教委の鈴木教育長、渡辺課長、藤本主事には格段の御便宜を得た。

執筆に当っては、岩越二郎氏、渡部晴雄氏、東北大高橋富雄教授、内郵高校高萩精玄氏、竹島国基氏からの御高教を得た。

執筆分担はつぎの通りである。

- 第1章~第3章、第5章、第6章 渡辺一雄
- 第4章、写真 松本友之
- 実測図作成 馬目順一、実測図製図 鈴木重美



上. 県史蹟指定地区とそこに残る造り出しある礎石 中. 全景(北を望む) 下. 全景(東を望む)



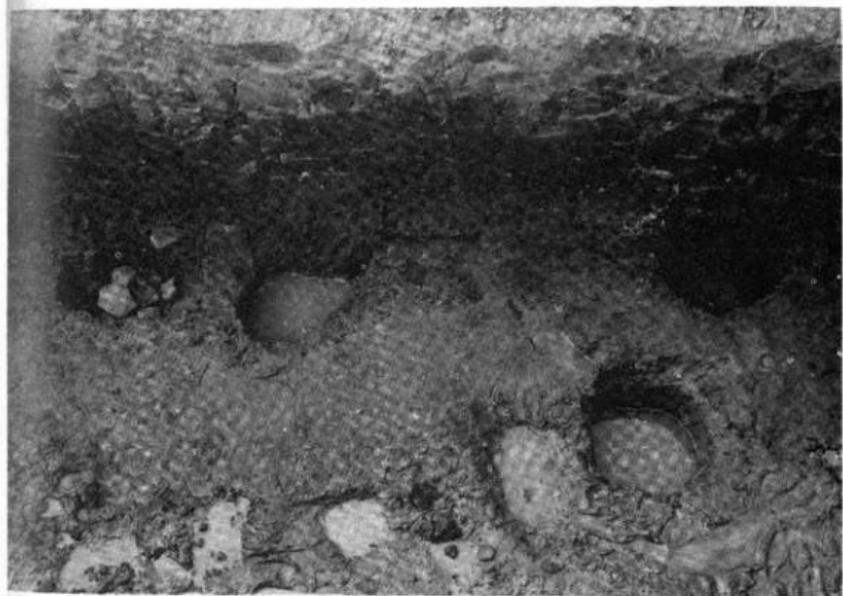
A 地区 6 区 南壁（柱穴内の瓦）



A 地区 1 区 北壁柱穴



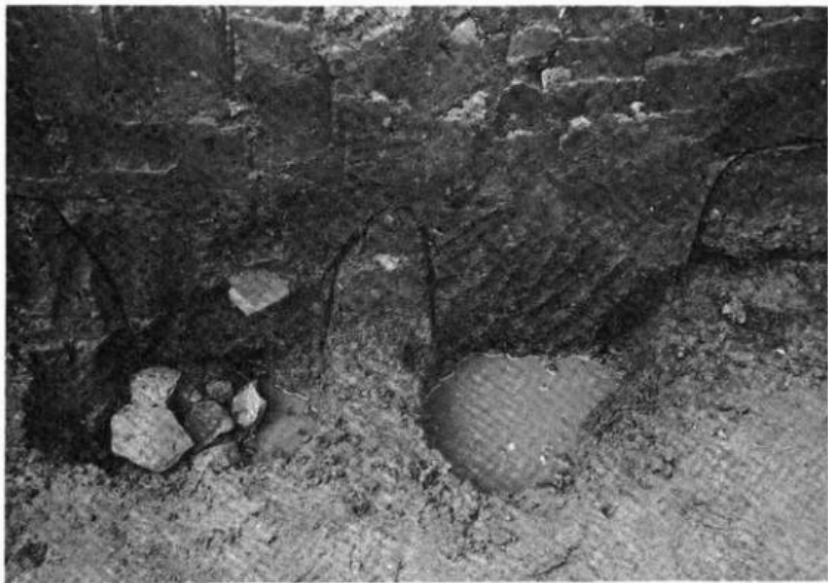
A 地 区 3 区 北 西 壁



A 地 区 3 · 4 区 北 壁 侧柱穴 群



A 地区 4 区 北東壁柱穴群



A 地区 3・4 区 柱穴底の瓦群

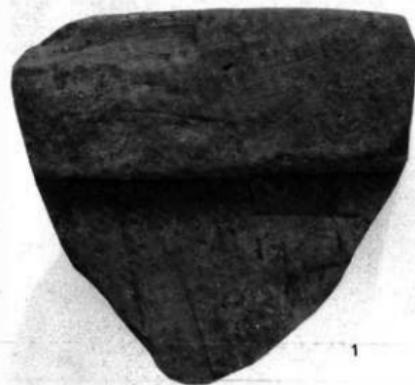
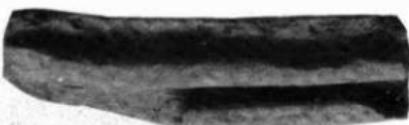


上 B地区 Bトレンチの礎石

下 B地区 Aトレンチの礎



B地区 北側の瓦群列



2

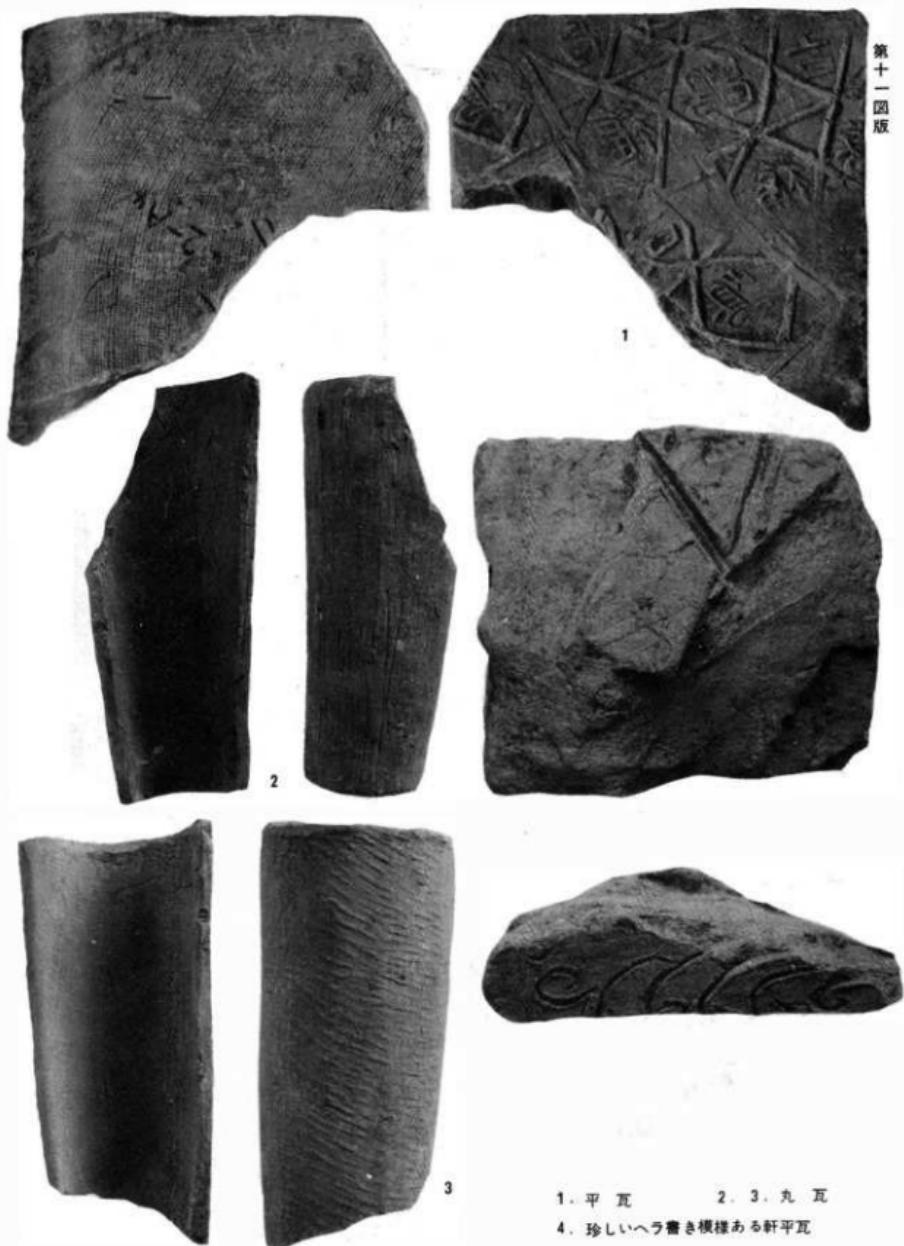
1



3

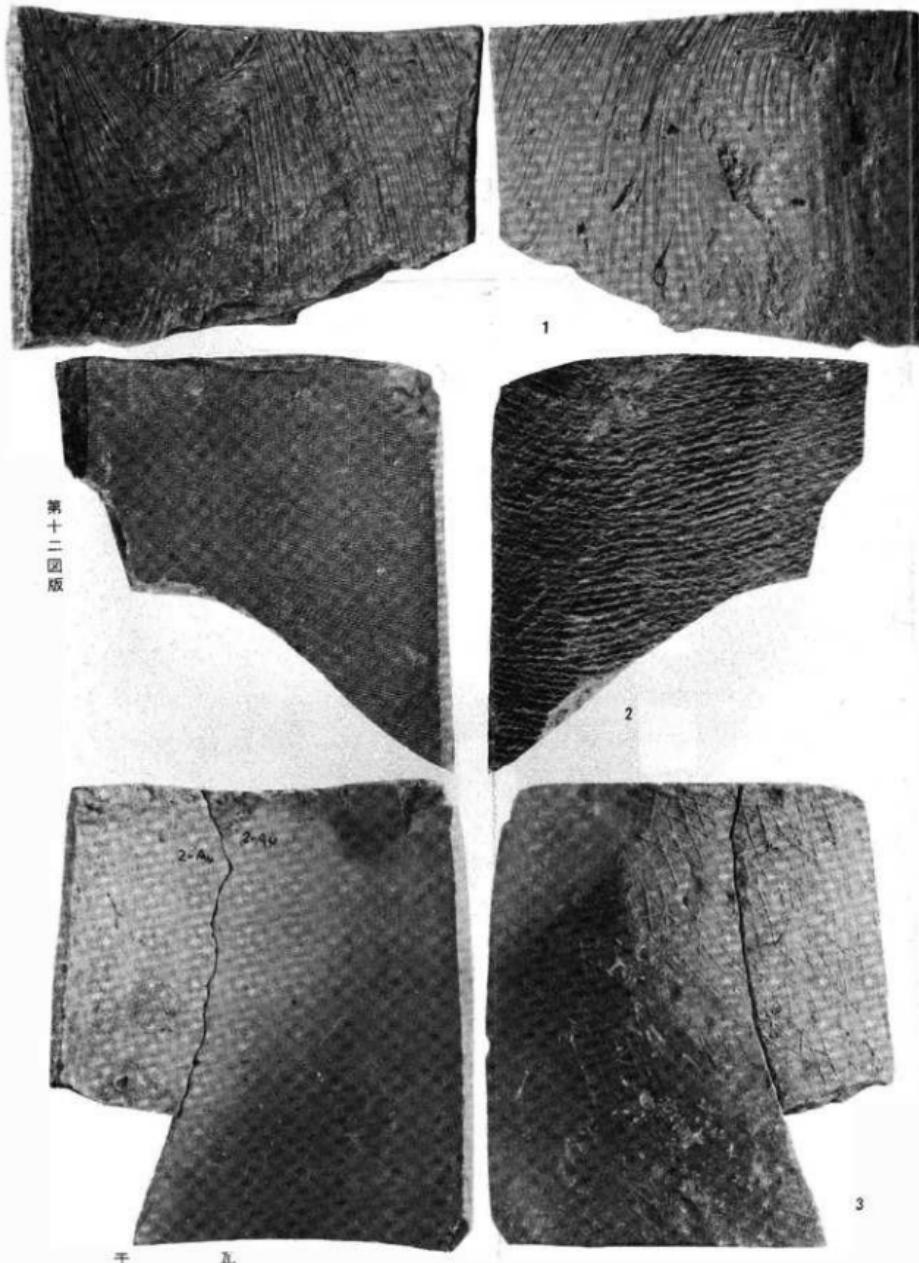
4

軒平瓦〔3は大礫石の脇より出土したもの。へら書き文字見える〕



1. 平瓦                  2. 3. 丸瓦  
4. 珍しいへら書き模様ある軒平瓦

第十二圖版



干

五

3



1



2



3



4



5



6

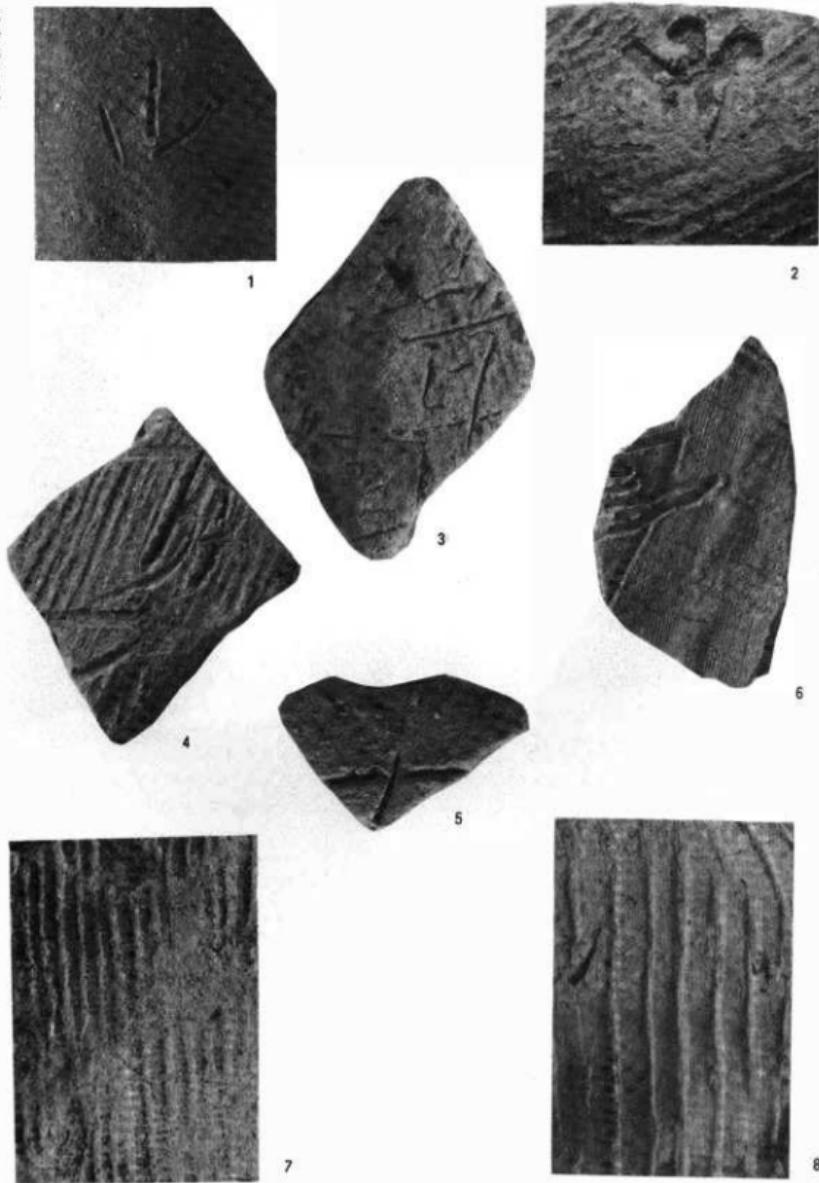


7

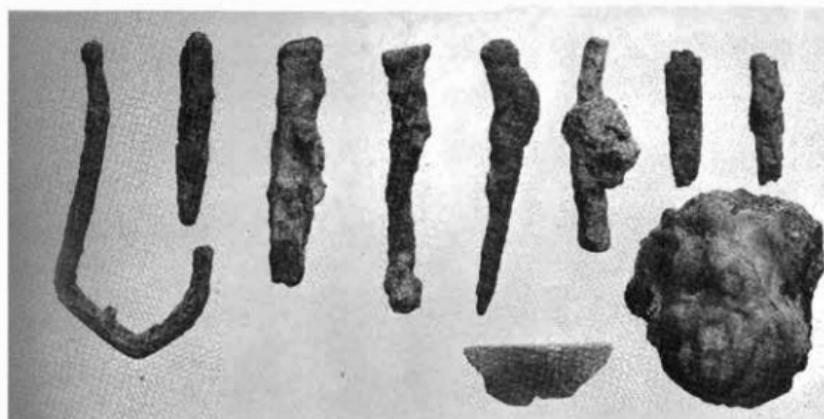


8

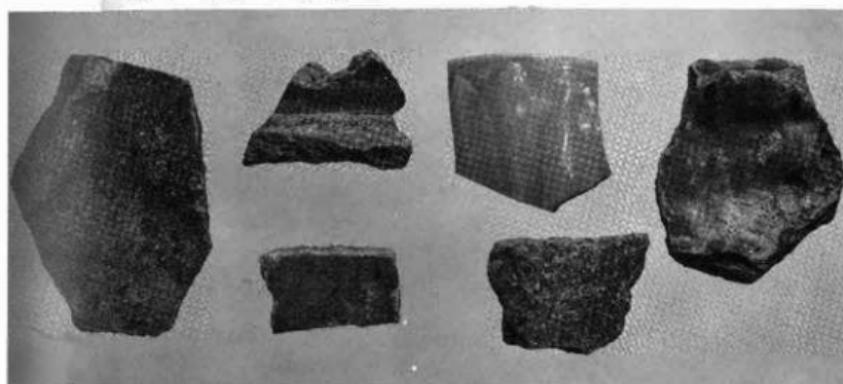
押型文字瓦・へら書き文字瓦。6は丸くすってある面戸瓦か?



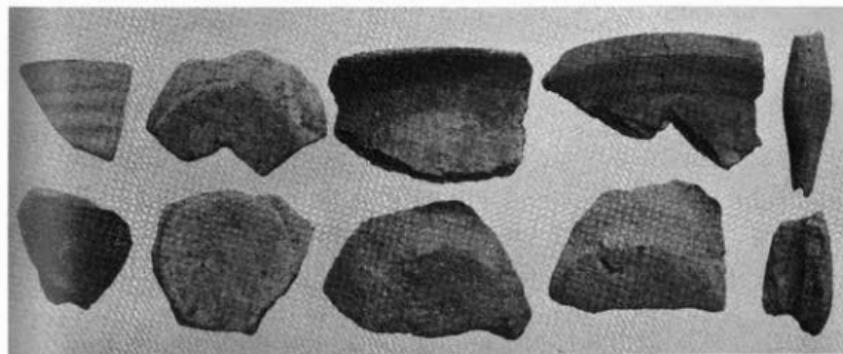
塞印・文字瓦等。7. 8は表面の整型痕



鐵釘・銅片・鐵製品



青磁片・灰釉片



土鍊・土器器片

# 郡山市山王館遺跡調査報告

## 第1章 緒 言

### 1. 発掘の動機と目的

近年、産業開発等によって、貴重な埋蔵文化財の破壊は急激なものがある。

新産業都市指定を受けた郡山市においても、このような遺跡の破壊は驚異的な速度で進んでいた。各種工事が機械力によって急速にすみられているため、埋蔵文化財の保存対策を強く望まれていても及ばないのが現状である。

山王館遺跡は、郡山市富久山町久保田にあって久保田部落の西側直後に接している丘陵台地上に位置している。台地直下久保田部落を南北に穿する旧4号国道線が、その使命を終り、新しく当山王館遺跡丘陵の西に新4号国道線が開通し、遺跡北部には磐城街道が4号国道への接続道路として新たに開通し、台地が削られ、遺跡一帯は交通の便利、商店街に近く、快適な住宅造成地と化し、家屋・住宅の建造物が激増、貴重な縄文遺跡の破壊、消滅が案じられていた。

昭和39年新産業都市指定を受けた郡山市の地域造成計画として、当山王館遺跡中央を東西に縱貫している幅員4m道路を産業道路として新平野に結ぶ構想のもとに幅員16mの拡張計画と、遺跡南側に児童遊園地造成計画が昭和42年度事業として実施されることになり、遺跡の崩壊が明らかとなり、その工事前に埋蔵文化財調査の必要が望まれ、昭和41年度国庫補助事業として、本遺跡の発掘調査を県教育委員会によって行なわれた。

山王館遺跡は、明治以降、特異な口縁部をもつ土器の出土地として知られ、昭和初期には久保田町の早川金吾氏の所有地より土採り工事中に部厚な、渦巻文様をもつ口縁部とその裏の胴部片が出土し、その後耕地整理、土採り作業や、昭和26年遺跡の東部に児童通学道路工事中にも壺・甕・鉢等の出土があり、「福島県遺跡地名表」(1860)には、「縄文中期土器、縄文晚期土器、石鏡、石斧、石錐」の出土地として記録されている。「福島県史、第6卷、考古資料」中には87、88、89図版に壺・深鉢が掲げられており、その他小原町円寿寺にも、部厚い大きな渦巻文様をもつ口縁部片や壺が収蔵されている。しかし、これらの遺物はいずれも正規な発掘調査によるものではなく、出土地、出土状況、埋没状態などの正確を欠き、ことに最近の「考古学ブーム」による盗掘も行なわれているので、当山王館遺跡のもつ学術的価値、縄文中期遺跡性格の究明、遺物の埋蔵状態の調査を主眼として8月18日より22までの短期間であったが、遺跡の一部を発掘調査した。

### 2. 既住の調査

前文に記述せることなく、当遺跡については学術的発掘調査が行なわれたことがなく、当地域一帯より偶然に耕地整理、土採り作業、家屋造営の場合にのみ出土しており、これらの出土品に対する考察は、

「福島県の古代文化」、昭和25年発刊、福島県教育委員会、「福島県遺跡地名表」の中に土器文様より縄文中期遺跡と地名をあげているのみであって、他に土器、石器、遺跡についての調査研究は今まで行なわれていない。

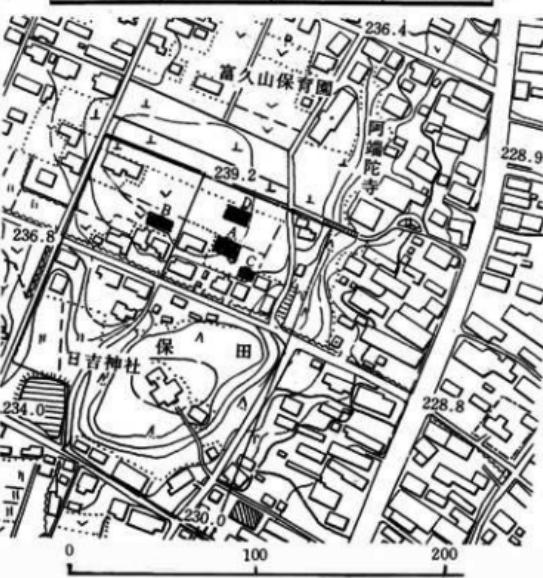
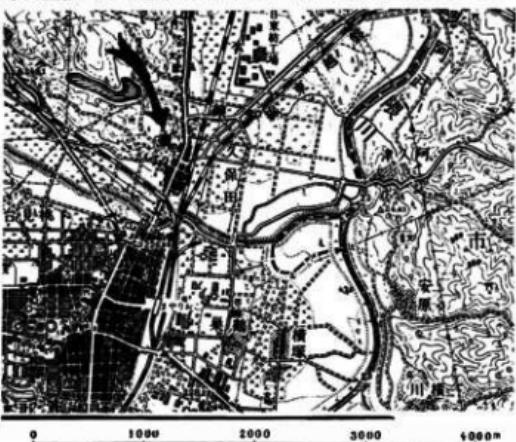
## 第2章 遺跡周辺の地形・環境

### 1. 地 形

山王館遺跡は郡山市富久山町久保田字山王館および字上野にわたる地域一帯を指し、山王館遺跡として「福島県遺跡地名表」「福島県史」に登録されているために、普通山王館遺跡と総称しており、今後もその名称で呼ばれることと考えられる。

山王館遺跡地は、郡山駅より2kmの北方にあたり、東北本線と磐越西線が分岐すると、その間に古木で一むらの森を見出せる。これが縄文中期遺跡の山王館遺跡である。

遺跡は丘陵台地上にあり、この台地は奥羽中央山脈の隆起以降、長い世紀にわたる自然作用により、流出、運搬されて堆積形成された洪積層突端上の平坦部にある。標高239.5mの地域である。地層は下層より礫層、細砂層、黄褐色粘砂土層、粘土層、腐蝕土層と堆積互層をもって形成され、礫層上部には一部に30cm~1m程度の緑色粘土層で挟まれた泥炭層を丘陵北部に伴っている。洪積層突端である台地東部は急激な崖となり断崖状となっており、この台地の南部は逢瀬川により南から、阿武隈川により東から盛んな活動期の浸蝕を受けたものと思われる。当遺跡台地南方に郡山市赤木浸蝕谷に対し、その中间を勢力を失った現在の逢瀬川が西より東に流れしており、その両岸には平坦な氾濫段丘が現存している。東方台地直下より阿武隈川の氾濫堆積原が幅2kmに及ぶ洪積層を形成し、川の流れは現在阿武隈高原の西麓に遠く離れて流れおり、浸蝕活動の勢力は遺跡北方に逆池、善完池の谷を作っ

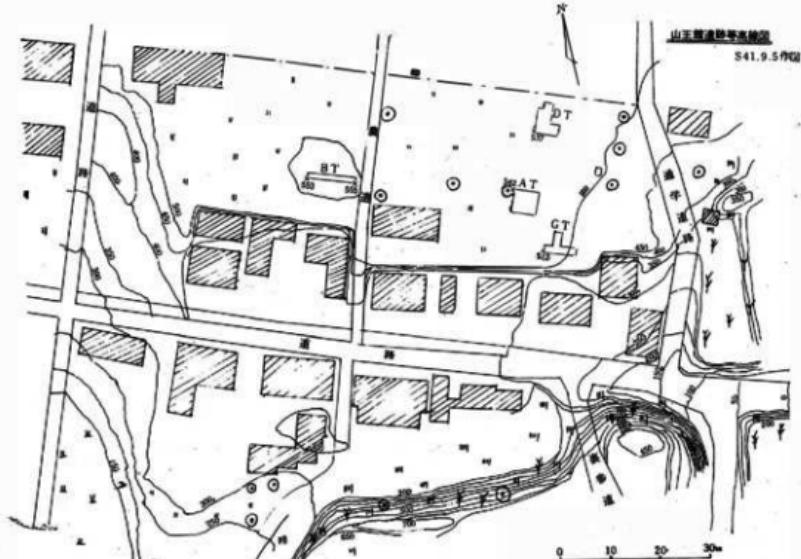


### 山王館遺跡

た。西部は、これらの川の支流の浸蝕活動を受けたが浅い谷のみの状態となり、丘続きとなって連なり、森林を形成した。

遺跡台地は西は山を背負い、南に郡須の連山、東に阿武隈高原、北に安達村・良諸連峰が眺められ、東南脚下には池あり、湿地あり、川あって高燥な勝地であることに気付く場所に占位している。

遺跡一帯は昭和初期まで桑畠に一部が利用されておって、それ以外は山林の状態であった遺跡東側は断崖となって、その崖下を旧4号国道線（陸羽街道）が南北に横走している。この街道は慶長9年（1604）に開通、それまで東部逢瀬川沿岸の河岸段丘上にあったところの久保田部落が、新しい街道沿いに移村し、元禄中期までに全村が移り、街道を挟んで農業村落として現在におよび、村落と遺跡台地との差は10.4mを示し



遺跡名の山王館は、遺跡に接して南側に古い伝承の日吉神社が祭祀されている。日吉神社は明治の廃仏棄釈以降の名で、それ以前は天台宗系の「山王様」として久保田部落の鎮守として崇められていた。この境内は中世の跡地でもあり、土塹、水濠も残されており、「山王館」と呼ばれていた。この地名が歴史に知られたのは天正16年（1588）および翌年の2度、伊達政宗が声名・佐竹・二階堂・石川・白川の連合軍と戦った、郡山合戦または座田合戦の際に政宗の本陣として有名であり、この地域の丘陵台地を通称「山王館」と呼ばれている。

## 2. 附近の遺跡

高久山町久保田は、今までのところ縄文中期の山王館遺跡を始めとして、縄文後期・晩期の遺跡が洪積層台地上に散在し、山王館遺跡西には住居跡も出土したが破壊されてしまった。統いて弥生式の出土品は現在まで確認されておらず、古墳、土師、須恵の各遺跡は近在に数多くあり、中世におよぶと板石供養塔の供養塔群の豊富さは上古より中世におよんだ歴史資料が夥しく残されており、福島県遺跡地名表に記録されているものに次のとく所在する。

愛宕遺跡

土師器・須恵器

南田遺跡	土師器・須恵器	乙高遺跡	縄文晩期
上野窓跡	土師器・須恵器	古町遺跡	土師器・須恵器
古坦遺跡	土師器・須恵器	太郎殿前遺跡	土師器・須恵器
大久保遺跡	縄文後期・晩期		

等の遺跡が同じ隣接する台地上や周囲 2 km 以内にあり、東北方 3 km は郡山地方で有名な陣場古墳群もあって直刀・管玉・勾玉・ガラス小玉が出土している。山王館遺跡内には県重要文化財指定の板石供養塔婆群や、遺跡に接する阿弥陀寺境内には永仁・正安年紀銘の板石塔婆もあって長い世代にわたった文化相を今に伝えている。

### 第3章 調査経過

#### 1. 調査までの経過

山王館遺跡の発掘調査を実施したいと関係者の間で話し合いになったのは、昭和40年8月、新産業都市指定地区遺跡調査で古龜田遺跡の発掘調査終了後であった。

山王館遺跡は、産業道路拡張のために破壊される運命にあったので早急な調査の必要にせまられていた。昭和41年にはいり、4月富久山公民館より山王館遺跡の一部が、遊園地になることに決定したとの連絡があり、4月30日郡山市教育委員会は山王館遺跡を現地に視察調査した。遊園地予定地は遺跡の重要な部分にこそかかないが、現地の状況からしても、遺跡の破壊度は急速に進むと断定し、県教育委員会へその旨を連絡し、昭和41年度の新産業都市指定地区遺跡の発掘調査を山王館遺跡としたい旨を報告した。

#### 5月10日

管内公民館長会議を開催したおり文化財保護に対する方針を討議、富久山町公民館長には山王館発掘調査の協力を依頼した。

#### 5月29日

郡山地方史研究会総会において山王館遺跡の発掘調査について積極的な協力を依頼した。

#### 5月30日

41年度福島県文化財専門委員会において、前年度よりの継続事業である新産業都市指定地区遺跡調査を山王館遺跡の発掘調査に決定した。

#### 6月4日

福島県文化財専門委員である田中委員が富久山町に出向して、現地調査と支所・公民館関係の意向の打診と実地調査を行なった。

#### 6月初旬

市議会において一般質問の折、富久山町選出の議員によって山王館遺跡の発掘調査を是非実施してほしいと強い要望が提出された。

#### 6月24日

郡山市文化財調査委員会議を開催したおり、富久山町担当の調査員に協力を依頼、富久山町公民館に文書で正式に発掘決定を報じ、市教育文化財担当職員、富久山町公民館職員による地主交渉を開始した。

#### 7月7日

県教育委員会文化振興係員が来郡、郡山市教育委員会社会教育課全員、県文化財専門委員田中正能・草野和夫が集会、打合せ会を郡山市公民館で開催、担当者・調査員・期間・日時を決定した。

#### 7月13日

市教育委員会社会教育課は富久山町支所に出向、富久山町公民館土田主事、市文化財調査員高橋康弥とともに、土地台帳による地主および耕作者を支所資料によって確認、地主交渉をした。

7月18日

市文化財専門委員会を開催、山王館遺跡の発掘調査の実施につき詰問、文化財専門委員会より是非発掘調査の必要を答申される。

7月23日

地主の承諾者が地元関係機関・市教育委員会の努力により取りまとめてることができたので、早速県教育委員会に送付した。

7月29日

市文化財専門委員会による西田町・日和田町地区的文化財視察の途中、山王館遺跡を調査した。

8月17日

市教育委員会社会教育課、富久山町公民館全職員、岩越県文化財専門委員、田中県文化財専門委員および、鈴木・斎藤・鹿野（正）市文化財調査員が富久山町公民館において最終打ち合わせをした。

この間市教育委員会社会教育課において発掘準備手配を進めてきた。（金崎佳生記）

## 2. 調査組織

調査主体 福島県教育委員会

実施機関 郡山市教育委員会

調査期日 昭和41年8月18日～22日

発掘担当者 梅宮 茂（日本考古学協会員）

田中 正能（福島県文化財専門委員）

調査員 草野 和夫（福島県文化財専門委員）

鹿野 弇（郡山市文化財調査員）

鈴木 守康（郡山市文化財調査員）

草野 喜久（郡山市文化財調査員）

斎藤 誠（郡山市文化財調査員）

事務担当 池上 勉（郡山市教育委員会）

金崎 佳生（郡山市教育委員会）

協力高校 郡山工業高等学校・郡山商業高等学校・安積女子高等学校・郡山女子高等学校

協力機関 富久山町公民館・郡山地方史研究会・富久山町郷土史研究会

なお、前述調査員のほかに暑さきびしい日、あるいは台風の篠つく豪雨の下、限られた日数の中に一応の発掘調査の成果を得られたことは特に次の方々の御協力あつたまものと深く感謝申し上げ、遠方から通われ、泥にまみれた姿で毎日御勞りになったことを御礼申し上げたい。

郡山市 国分伝藏（郡山市市会議員）

原慶治（郡山市市会議員）

安斎倉美（郡山市文化財専門委員）

木目沢伝重郎（福島県史調査員）

鹿野正男（郡山市文化財調査員）

佐藤精一（郡山市文化財調査員）

安斎宮司（郡山市文化財調査員）

高橋康弥（郡山市文化財調査員）

生田目秀男（郡山市文化財調査員）

松田市郎

古川猛（福島県考古学会員）

福島市 目黒吉明（日本考古学協会員）

Aトレントは床面を掘り下げる。トレント南側に灰暗色の径1~70cmのビット2個を見つける。そのビットを掘り下げる。ビットは木炭層、粘土層、黄色砂層が互層をもっており、このビット外辺より大型壺の華麗な隆起文をもった口縁部が出土する。厚さ2~3cmで胎土に珪石片が混入されている。

CトレントはAビットを掘り下げる深部は木炭混合層が黄色粘土層と互層複合している底部片大小、口縁部、胴部片が出土。

Dトレントは遺物出土状態の実測、出土品整理後東側に2m延長発掘したが遺物の数が少なくなっている。トレント下部より焼土および土器片が出土するので、これを追求した。

#### 8月21日（日）晴

Aトレント東側ビットより小型壺が深度2mの個所より完形で出土、口縁部に半截竹管文をもち、肩部に隆起文をつけて対して舌状の突起部をもち、胴部に斜織文が全面にあり、網代模のもので平底である。西側ビットよりは、深さ128cmの個所において「三角墻立体土製品」が木炭層、粘土層の互層中より出土した。三角全面に半截竹管文の文様を持つ中央部に貫通する孔もあって、この土層中より木炭層に骨片も出土した。さらに2.3mの個所より小型壺が横倒した状態で倒れたままで出土、それ以下は黄色の砂礫土となっていた。この層が地山と考えて発掘を終わった。

CトレントはC Aビットを掘り下げる木炭・粘土互層中深さ1mのところより小型壺が完形のまま横倒して出土、1.1mの地点で口縁部に追跡文を持った無文の深鉢が出土、さらに深さ1.8mの地点で口縁部に2個並列の突起を4個所についた無文の楕円状のものが完形で出土、その下は黄色の砂礫層となり湧水が多く作業を止めた。

Dトレントは東側に延長した分も含めて全面的に掘り下げる土器片の散布と焼土を追求したが、土器片の出土も少くなり、焼土のビット状を掘ることも困難となったために実測および写真撮影を行なった。

#### 8月22日（月）雨

終日雨にて応援協力の高校生徒の不参加が危ぶまれたが、全員雨の中に集合、申訳ないが全身雨にぬれてトレントの埋戻し作業を行なう。Aトレント・Bトレント・Cトレント・Dトレントと全部午後2時までに終了、心残りではあったが限られた日程と予算のために山王館発掘調査を終了した。

#### 4. 遺物の整理

発掘終了後、出土品を都山児童文化会館に保管、担当者、調査員のうち主として田中正能・鈴木守康・斎藤誠が水洗い作業、土器トレント別分類整理を行ない、復元可能土器の選定、復元作業の大部分は鈴木守康がこれを行ない、実測図作製は田中正能がこれに当たった。遺跡図トレント作図は都山工業高等学校建築科の学生と草野和夫が行なった。

##### 執筆分担

第1章	田 中 正 能
第2章	田 中 正 能 金崎佳生
第3章	田 中 正 能 斎藤誠
第4章	田 中 正 能
第5章	田 中 正 能
第6章	梅宮茂 田中正能
第7章	田 中 正 能

梅宮茂が総括して加筆を行なった。写真は田中正能の撮影のものを使用した。

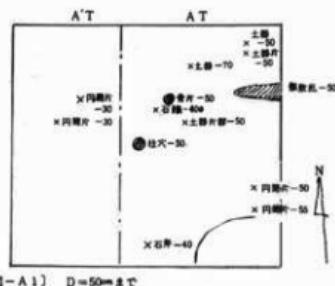
## 第4章 遺跡の調査

### A トレンチ

Aトレンチを発掘予定地の中央部に該当する位置に設定する。南北に  $3\text{m} \times 5\text{m}$  の面積を発掘した。表土は20cm前後の黒色腐蝕土層で耕作のため相当に擾乱されておりが「大木8B」型式相当の赤色・赤褐色の復元不能の土器片が散乱して出土した。黒色腐蝕土層下部は黄褐色の砂粘土層となり、この黄褐色砂粘土層57cmの深さより、焼成の良い厚い胎土をもった、隆起文と把手をもつ腰の口縁部が出土、黄褐色砂粘土層の下部は黄褐色粘土層の固くしまった地山となっており、この位置において柱穴と見られる直径20cm~28cmの黒土の落ち込みが現われ、赤く焼けた焼土を中心に焼土を囲むように7個が数えられ、トレンチ南壁に黄褐色粘土層の段状になっておる断面も現われた。しかし土器片や網代痕をもった土器底部は出土するが、焼土附近には炉の囲み石など全然見当たらず、石器も僅かに石斧片、石鎌各2個と石核と思われる石英片が2~3あるのみであったが、一応住居跡と考えて柱穴、床面を清掃、そして西に2mトレンチを延長しA' とし、Aトレンチと同じ床面までに掘り下げた。しかし居住跡としてもプランの判然とするまでに至らず、床面に焼土、木炭の混在が下部にも包含されておる状態なので掘り下げて行きA、A' ともに同じ深床で平に下げA部南壁 2.2mの黄褐色粘土層より、黄褐色の焼成のよい部厚い胎土の腰の口縁部が出土隆起文で外面、上面、内面に装飾されて大きな把手を持っており、腹部に粗い斜縞文がほどこされている。トレンチA' 部西壁近く床面に直径1.3mの黒色土層の落ち込んだピットが発見される。トレンチA部南壁に接して同様の落ち込んだ直径1.6mのピットの2個が出土、このピットは、いずれも周囲の黄褐色粘土層と確然と区別されており、貯蔵庫と想定して、このピットを掘り下げる。落ちこんだ黒色土を掘り下げるとき木炭灰、焼土の包含土層で、この層中に木炭と混在して骨片が含まれており、細かになつて混じり合っていた。トレンチA' 部のピット2mの深さより赤褐色の「三角墻立体土製品」が単独で出土した。三角面および底辺・上辺に半截竹管文の連續文を施してあり、中軸に貫通孔を持っておる。さらに本ピットを下げ2.3mの位置に至ってピット南端部に「大木8B」平行の壺が潰れた状態で倒伏して出土した。この位置で木炭灰の包含層は終り、その下部は黄褐色粘土層となり地山と考

▲トレンチ平面図

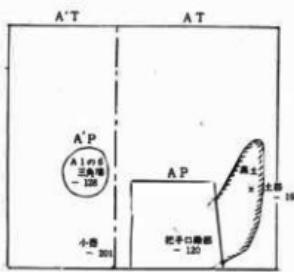
基盤面略水平に付断面略  
S.41.9.13(草野)



(図-A 1) D=50mmまで



(図-A 2) D=50~120mm柱穴数値は輪南北×深さ



(図-A 3) D=120mm以上

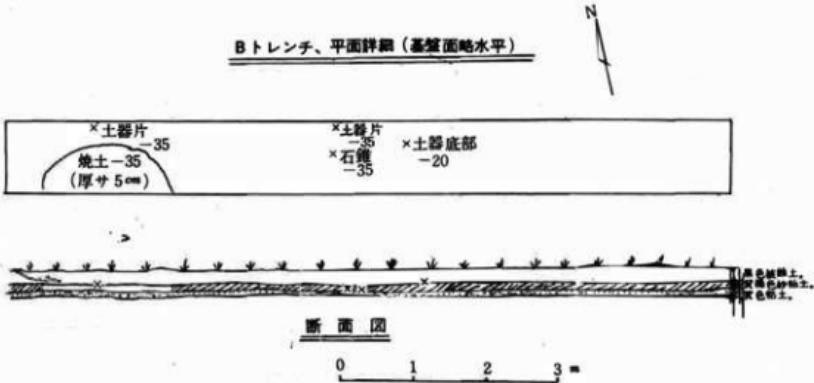
えてピットの追求を止めた。

トレンチA南壁面の黒色土層の落ちこみは、黒土層を掘り下げるにこの黒色土層はその中をトレンチ東端壁下を抜けてさらに伸びることが判明、トレンチ東壁まで35cmの厚さで、その中に木炭、灰、土器片を包含しておるが、このトレンチA部ピットを精査できなかった。

#### B トレンチ

Aトレンチの西方31mに位置し、東西に10m、巾1mのトレンチを設定して発掘した。表土は灰黒色の砂礫混りの畑地であり、作業の進行も容易と考えて着手したが、表土が以外に薄く7m~20m程度であって、その下部は一面に黄褐色の粘土層が東より西に向って10度前後の緩い傾斜をもって下がり地山と認められる地層が続き、黄褐色粘土層には擾乱された形跡は認められなかった。この薄い表土層中には上部に土師器壺片、杯片の破片があり、粘土層との接触部の地点には大木7B、大木8A型式の土器片、石核などが包含されており、口縁部、胴部、底部片が復元不能の状態で出土した。トレンチ西端部に径75cmの焼土塊が存在しており、石塊石片も見当たらず、土器片の小片が2~3枚出土したのみであり、焼土の外周および底部に亘って厚さ10cm程度の砂層が見出された。この砂層は人為的なものであってこれを追求して焼土下部を1m掘り下がったが、その下部は粘土層地山となって変化も認められず、作業を止めた。出土品には復元可能のものはなく、トレンチ東端より7m、深度35cmの個所より完形の石錐1個が単独で出土した。表土と粘土層の接触部に該当し、やや粘土層上4cm程度の地点で他に少しの石核片がこの地層に散乱しており、後代の擾乱が表土に加えられたものであるが、深くは荒されていない状態で、作業上このトレンチの発掘を中止した。

B トレンチ、平面詳細（基盤面略水平）



Aトレンチの南東6mの位置には東西2m×7mのトレンチを設定してCトレンチとした。

黒色の耕作土中には、復元不能の土器小破片が散乱しており、耕作による擾乱と見られ、厚さ20cmほどの表土を取ると、その下部は黄褐色の砂まじりの粘土層が固く締って、南東に10度程度の傾斜を見せており、黄褐色粘土層上部にはトレンチ東端より4mおよびトレンチ西端に深さ25cmで焼土が見られた。焼土の周辺より、大木式8Bの壺口縁部、胴部が包含されており、焼土を追って見ると深さ48cm程度において、焼土塊が姿を消すが、この焼土の周辺は径1.4m程度の灰黒色土層でもって外周の黄褐色粘土層と判然と区別され、これと並んで、この焼土の周辺には土器片、木炭なども包含されておって、これらを追ってトレンチ東端より4mの焼土を北側に1.5m×3mを延長した。深さ70cmの個所でトレンチ東端より1mにおいて口縁部に2条の隆起文をもち、斜縞文を全体にはどこした壺が20cm×16cm立方の花崗岩を覆う状態で出土、作業員の関係もあってこのピットを次第に掘り下げることとして集中、土層は木炭包含層、黄砂層

と5cm前後でもって交互に混在しており、1mの深さのところより口縁部わずかに外反して肩部に4個の釣手状の突起を持ち、全体に斜縞文をほどこし網代痕の底部を持つ小型壺が完全な姿で出土。1.1mの深さより追跡文を口縁部にもつ阿玉台式に類似する浅鉢が正常位で発見された。肩部、胴部ともに研磨されておって無文で灰褐色をして焼成は良い。さらに1.8mの深さに至って口縁部に2個の突起を並列して口縁に計4個の突起をもった無文の楕の出土が完形正常位で見られた。この土器は灰褐色状で胎土に桂石が混在しており、下部は地山の黄褐色粘土層となり遺物の混入を認めることができなかった。深さ1.9mのピットとなって非常に深さとなってしまったが、この表面怪の木炭灰、黄砂粘土層中ののみ土器、石核の出土が見られるのみで、このピット以外は黄褐色の粘土層となっており、Cトレンチにおいては計3個のピットを出土しておるが、限られた日数と作業員の都合もあって、東端ピットのみで調査を打ち切らざるを得なった。

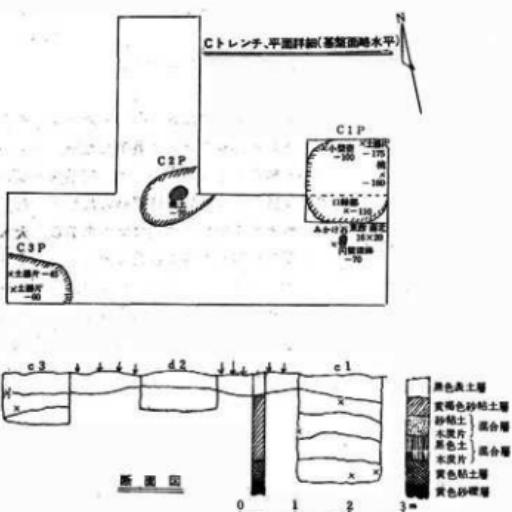
#### Dトレンチ

Aトレンチの北31mの地点に試掘溝として1m×6mのトレンチを設定し、発掘を行なった。地表から約20cmほどの耕作によって搅乱されていたが、この耕作土中からも縞文中期前葉の土器片約50点ほどが採集された。発掘が進むにつれて、トレンチ南半部に集中して土器片が発見された。とくには中央部から阿玉台式に併行すると考察される大型鉢があり、底部を上にして潰れた状態で発見された。

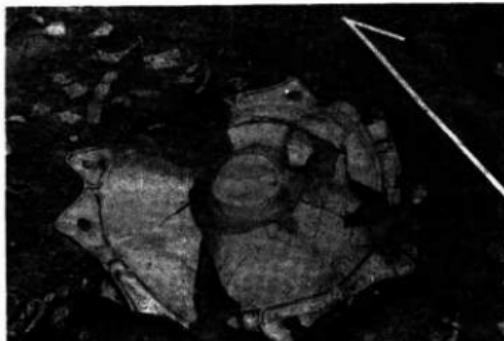
このため、この試掘溝をD1トレンチとして隣接地域を拡大調査することになった。耕作物の関係で想うように調査できなかつたが、D1トレンチの西に2m×4mのD2トレンチ、東側には2m×2mのD3、さらにこれらを南側に0.5m×5mのD4の各トレンチを設定し発掘を行なつた。

この結果、上下2つの文化層の存在が明らかとなつた。

上層はD1トレンチの北部を除く、



断面図



Dトレンチ上層の出土状況

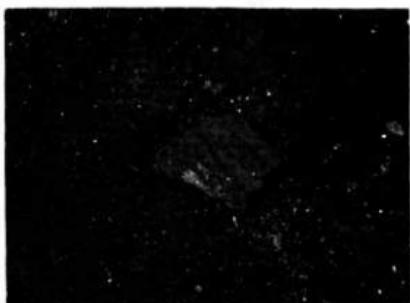
各トレンチ内で、地表下30cm～35cmの深さに一層をなすもので、その主要な出土品は、前述の大型鉢（図版(1)）をはじめ、図版(3)・(8)と実測図B、に示した土器と土器破片多数、そのほか土偶（土製品図版）、三角土製品（図版 実測図D）などが発見された。

下層は地表下50cmの深さの黄色土の直上にある文化層であるが、これからの遺物の発見は非常に少なく、土器片数点と石錐1、黒曜石片1などであった。

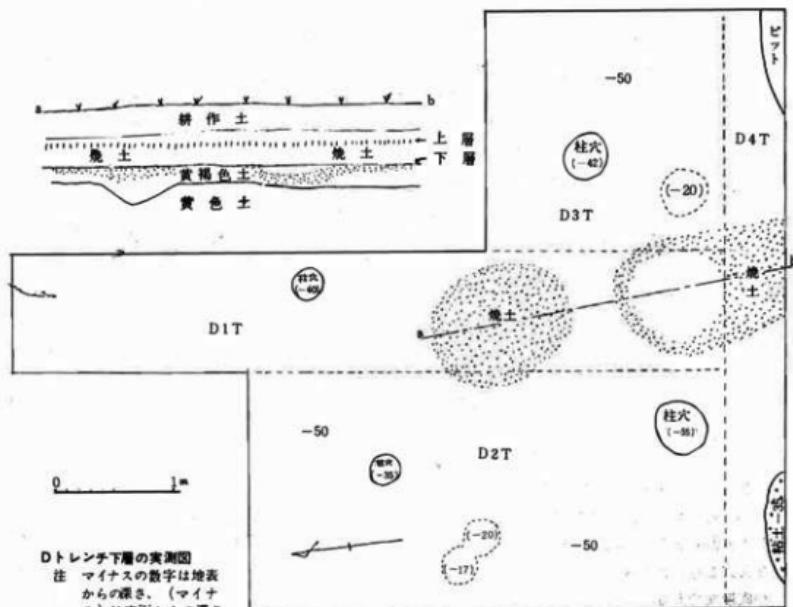
しかし造構として焼土2個所と柱穴4が発見された（図版参照）。

焼土は厚さ数cmおよび一時的な焚火ではなく、住居内の炉跡と推定されたので、住居跡プランの把握に努めたが、明らかにすることはできなかった。下層の時期的な考察は土器片が少なかったため明らかではないが、五領か台式に類似の鋸歯文が1例あり、ほぼこの時期に属すると推定された。

したがって上層と下層の時間的な差は非常に近接するものと考えられるが、上層か後世の二次的な堆積とは考えられないで、僅少の差で



Dトレンチ下層の出土状況



Dトレンチ下層の実測図

注 マイナスの数字は地表から  
からの深さ。（マイナス）は床面からの深さ  
を表す。

あるが、縦年的な上下が考えられる。

今後、下層の文化相が把握できれば縦年的な分類が可能となるであろう。

## 第5章 遺物の調査

### 1. 土 器

- (1) 図版浅体はDトレンチより出土したもので、完形に近い状態で伏せられていた。口縁部直径68.6cm、高さ27cm、底部直径15.4cm、暗褐色の焼成もよく固くしまっており、胎土に石英片が混入している。高さに比較して非常に大きな口縁部をもっており、器体の厚さ1.5cmの波状突起をもつ、この浅体は底部より18.8cmを体部として底部より直に大きく外反した傾斜をもって上部に広がり、この位置でさらに外反せる口縁部が急激に外側へ伸びた姿に作られている。口縁部には大きな一对の山形突起が4個あって、波状口縁となる。山形突起には、それぞれ直径2cmの円い穴があけられている。体部と外反せる口縁部の境には隆帯文が施され、口縁部口辺、突起部の外周を一条の隆帯文がつけられている。外反している口縁部内面は、これら山形突起の周囲をめぐらして2列の半截竹管の刺突文がめぐらされている。底部は網代文の平底である。外面・内面ともに隆帯文、半截竹管の刺突文以外は無文で両面が丁寧に磨かれてある。大木8A式または関東地方の阿玉台式の影響を受けた土器でないかと思われる。
- (2) 図版土器はCトレンチより出土したもので、出土状況は較質の四角形花崗岩をおおった状態で口を北に向けて発見された。高さ39.8cmで口縁部に2条の隆帯文がめぐらされている以外器体全部に太く粗い斜繩文が施されており、肩部にいたって急激なふくらみをもたせ、口縁部でわざかに内済する。口縁には突起もなく平であり、内面は磨かれている。底部は網代文、器体厚さ1.2cm、胎土には雲母・石英片の混入が認められ、大木8A式土器と見たい。暗褐色の成のよいものである。
- (3) 図版土器はDトレンチ出土、奥羽地方に獨得な発達を見せた円筒式土器の姿をそのままに伝えた型状をしている深鉢であって、上方にいたって広がりをもち、直線的に延び口縁部は少しき外反する。五領台式土器に平行する土器と見てよく、器体全面に斜繩文がほどこされ、口辺に太い半截竹管によって押込んで突起状口辺となっており、口縁部附近に太い半截竹管により爪形文と見られる半截竹管文が2列に回され、胴部を4区にわける隆帯の懸垂文をもち、爪形文と見られる太い半截竹管文の下部にはΩ字状の細い1列の半截竹管による刺突文様があり、赤褐色の固く焼成のよい土器で、底部は網代文、器体胎土に石英片混入器厚1cmの分厚い土器である。
- (4) 図版はCトレンチ出土、黒褐色の非常に焼成のよい小型壺である。胎土石英片混入され、全面に斜繩文が施され、肩部外周に4個の把手を張付け隆起させている、隆起把手は○状の姿をしており、把手部下端は弧状で内向しており、突起把手上面にも半截竹管文がつけられ、口縁部を欠いておりキャリバー状のものがどうか不明であるが底部無平底で高さ9.8cm
- (5) 図版はAトレンチより出土、赤褐色の焼成のよい小型壺で胎土に石英片混入しており、胴部外周を4区にわけてY字懸垂の隆帯文があり、隆帯文上部および口縁部には半截竹管文が1列づつ施され、Y字型に区画された4区のうち2区には3列の半截竹管文の不規則の文様がつけられており、全面に斜繩文をほどこし無文平底高さ6.2cm、口縁部厚さ0.4mmである。
- (6) 図版Cトレンチ出土、2個の一対となる山形突起を口縁部に4個所につけられており、暗褐色で胎土に石英片の混入が多く、焼成はよい。全面無文であって分厚い作りである。阿玉台平行土器と見てよく、大木8A式と見られる内面、外面はていねいに磨き出されており、繩文を施した痕跡は見あたらない。底部は平底無文である。
- (7) 図版Cトレンチ出土、暗褐色石英片混入の土器で焼成のよい小型の鉢である。口縁部は太い半截竹管による凹凸の押型文が付けられて全体的には波状口縁状となっており、4個の山形をもつ、全面に斜繩文が施され平底網代文、円筒状をなし口縁部にいたってわざかに外反する。
- (8) 図版は上部口縁部、底部ともに欠損して全体の器形は不明であるがDトレンチより出土したもので、胴部

は円筒状を示しており、口縁部が大きく外反している。全体に斜繩文をつけ、体部には3条の沈線平行文を胸部には2条の沈線によって渦巻文が画かれている。

(9) 図版は当遺跡発掘調査以前に出土したもので、円筒型をなし上部わずかに外反、口縁部なく平行沈線文、渦巻文があり、沈線文内に刺突文の痕跡もなく隆起文重文で胸部を4区に区画されている。

図版説明は以上であるが、当遺跡出土の土器群を総覧して見た場合、文様のほとんどが斜繩文のみであって、そのほかには無文型式と2群に分けられる。これらを地文として装飾文様には隆起文・隆蒂文・刺突文があり華麗な口縁部・装飾文・が作られており、これらの文様でもって渦巻文・平行文・懸垂文・山形文・曲線文・沈線文・追綫文の各種が見出される。胎土は雲母・石英片の混入されておるもののみで纖維の混入は見あたらない。土器形より奥羽地方盛行の円筒式土器と関東地方の下小野式、阿玉台式、五領台式の影響を受けておる傾向が土器型体や文様の手法に見出されて、東北地方纏文式土器編年の大木7B、8A、8Bの時期に平行することが明らかである。

## 2. 土 製 品

### (1) 土 偶

Dトレンチ出土、頭部、脚部が欠損のままで出土した。伴出土器は大木7B式、8A式土器と同位層にあって、暗灰色を呈して胎土に雲母、石英片が混入されている。厚さ0.5cmの板状土偶で女子像である左右不均衡の乳房をしており、身体の中心線を前面、背面ともに上下に沈線にて通り左右シンメトリーに施されて無意識にかかれたものであろうが、これらの沈線文は当時の服装を表現したものであろう。この土偶と同形式のものが福島市音坊の纏文中期遺跡から大木7A式土器とともに出土している。

### (2) 土 偶 頭 部

Dトレンチより出土、始めは土器片とのみ考えておったが、水洗いの結果土偶頭部と判明したもので、赤色の焼成も非常によく固く焼しまっており、首部には胸部との接合痕跡が残され頭部上方には接続痕の形跡が見あたらず土器口縁部把手等に用いられたものとは考えられず単独の土偶頭部である。胸部脚部の出土は発見されず、ハート型の土偶の姿をしておって前面に突き出された頭部であろう。鼻を中心として隆起させ左右を円型に指で押し込んで凹面となし、竹管で目をつけた明るい焼成からくる感じと相まって、非常に朗らかな面相をもつ手法がとられ、無造作の中に独特な創造性を發揮した纏文中期人の芸術感覚をさりげなく表現しておって、奇怪な顔面を持った土偶の中の新しい発見であり、何か後世の古墳時代人物形象埴輪の初原的な感じを与える出土品である。

### (3) 三 角 土 製 品

Dトレンチ出土、赤色の石英片の混入多い胎土をもった焼土のよい土製品である。形は正三角形、各辺はいずれも弧状をなしている。表面三角形の一辺にのみ半截竹管による刺突文の直線文、弧線文が施されており、表面中央部は意識的に突起状のものがあって破壊されたと思われる破壊痕が残されている。裏面は全面磨かれており緩く内湾状を呈しておって大木7B、8A、8B式土器と伴出したものである。このような土製品は関東、奥羽の纏文前期の中頃から中期におよんだ時期に板状土偶から派生し、土偶と同じく呪術的な用途があったものであろうと考えられている。

### (4) 三 角 塙 立 体 土 製 品

A'Tレンチビット内1.28mの深さのビットのほぼ中心部に骨片、木炭の混合黒色土層より出土、赤褐色の焼成のよいもので胎土に石英片、わずかであるが雲母片も混入しており、三角各面には半截竹管の刺突文がそれぞれに異なる文様に施されており、三角塙底辺、上辺には竹管文の18~23個の刺突文があつて中軸に貫通孔がある。三角塙立体土製品は新潟県、長野県の纏文前中期より中期の遺跡に出土例もあって、装身具といわれているが、当遺跡の本出土品はビットの中心部、大体屈葬遺骸の胸部より腹部に該当する位層で確認されたもので装身具とともに死者の鎮魂具を兼ねた呪術的な土製品で纏文中期の埋葬方法に関連性があるのでなかろうかと思われる。

## 第6章 考 察

以上述べたごとく、当山王館遺跡の発掘調査は福島県考古学の各研究団体、地元の篤志家および協力学校の一一致せる能力の結果として予期以上の成果をあげることができた。

福島県内でも、各地の埋蔵文化財の破壊が意識すると否と問はず、日常茶飯事のごとく行なわれ、幾千年来我々の先祖が遺した文化遺物が大地の中で静かに眠り、後代に伝えるべきを次々と破壊・消滅していく時代である。このような文化遺物が破壊される前に、調査・記録してわれわれの次代に遺すことこそ、現在における人間としての義務でなければならない。幸いにも当遺跡は新産業都市造りのための工事直前に開発機関の理解ある発掘調査を行ない得たことは非常に有意義な喜びであった。

作業は炎熱の中で行なわれ、折しも台風も襲来して雷雨もあり、困難な条件もあったが、各関係者の熱意と協力により、予定の発掘調査を無事に完了することができたのである。

当遺跡発掘調査の成果は富久山町古代資料を提供したのみでなく、福島県および日本考古学界にも貴重な調査記録として後世に遺し得るものがあって、縄文文化の輝かしい時期をもった東北古代文化の解明に重要な資料の出土があったことも一つの成果であった。

早くから、手のこんだ装飾性の多分にある華麗な文様の特異土器の出土する縄文中期遺跡として著名であった当遺跡である。縄文中期とは縄文文化の文化内容が飛躍的な進歩をとげ、その社会と生活体系に大きな変革があった時期で生活内容の充実より土器にも用途に従って各種の分化したものが作られるにいたり、土器は実利を考えず統一、リズム、均整、様式などに芸術的要素を表現し、他面呪術的な趣きを濃くしている。土器自体に見られる型式の一様化は、すでに当時の人々が一ヶ所に集落を作り、定住する傾向を強めたものと考えられており、これら集団間の往来、交通もある程度の頻繁度を加えたもので当遺跡の出土土器群にも関東型式、奥州南部型式が複合しており、これらは福島県のもつ関東・東北の接触緩衝地帯としての宿命的様相を、すでに示している。土器文様のモチーフは渦巻文を中心であり沈線、隆起、張付けの各種も含まれ、直線文、曲線文、工字文もあり、外反せるものまたは内湾せる口縁部、各種文様周辺には半截竹管文が数多く見出され、1本内至2本の平行沈線を鋸歯状、渦巻状につけている。縄文そのものは撚糸斜縄文のみで、器体全面にはほどこされたものがほとんどであり、器体無文の浅鉢には関東阿玉台式土器と等しい口縁部にのみ追廻文をもった土器も発見されている。土器胎土には石英、雲母の混入されておるもののみであり、植物繊維の混入はなく、底部は平底の無文、網代痕が主であった。

当遺跡形成を見るに久保田台地は、かって阿武隈川の激しい浸食をうけ、東麓は断崖となり、西北もそれらの支流の浸蝕により南に浅い谷間がつくられ、遺跡台地を中心に囲むような形を持っていた。谷間には地下水の漏洩が溢れて小さい池沼が最近まで数多くあった。この湧水、漏水が久保田部落の発展の一因子となっていた。この地に人類の見出された歴史は久しい。洪積堆積層が河川の浸食をうけて幾千年か経て、その上に黒色の有機土層がかなりの厚さになってから当遺跡が形成された縄文時代である。発掘調査の結果縄文前期末より中期にいたって人類活動の場所となったことがわかる。東部は下に広々とした阿武隈川、逢瀬川の三角州があり、一面の沼沢地が広がり、北西部は浅い谷を接して豊かに繁茂する森林であり狩猟の対象となる山河の穫物の豊富に恵まれた。西に森を背負え東南に陽光を浴び見通しのよい古代の人々の生活の場としても格構の条件を備えておった。この地理的要素もあって、かつまた「福島県の古代文化」(148頁)に久保田、山王、開端(住居跡)、中期縄文の記録もあって発掘調査を中期の住居跡出土と予測して作業を行なった。しかし発掘の結果住居跡を見られるものは、Aトレンチのみで、これと中期縄文住居跡のもつ炉の石組も見あたらず、炉跡も確認できず、柱穴と想定した穴のみの検出で終った。他のA'、B、C、Dの各トレンチの総合意見として当遺跡は縄文中期の集団墓群と見るのが至当と思われるにいたった。集団墓群とした遺跡は郡山市のみならず福島県内においても珍らしく貴重な資料となつた。

地表下1m以下の深さに直径1m前後で竪穴が掘られ、遺骸が埋められたものと考えられる。遺骸は朽ちて完全なものは見あたらなかったが、黄褐色粘土層を掘り下げ遺骸を収めたらしく竪穴の中には黒色土が充填しており、この層中より人骨片が細片となって土とともに出土する。黄褐色粘土層の竪穴は地表より、いずれも2m前後の深さがあり、竪穴底部は地山の黄色砂礫層に達している。この竪穴および黒土より観察すれば、埋葬は屈葬と見てよい。これらピットに遺骸とともに埋納したと思われる大木8A、B型式、下小野、阿玉台兩型式平行と見られる鉢、小型壺、三角墻立体土製品が死者の周囲より見出された。三角墻立体土製品は竪穴のはば中心の位置にあって呪術的のものか、装飾首飾りとして遺骸とともにあったものか他に装飾用の副葬品は見出せなかった。竪穴の壁面は木炭混り黒色土、黄褐色砂土の互層をなして埋めており、平になった上に黄褐色の砂粘土層でおおい、さらに黒色土と埋めであると思われる。Cトレンチの場合には竪穴を埋めた上に黄褐色砂粘土層で埋めおおい、その上に標識としてか、風習の一つとも見られる四角形の較質花崗岩をのせてあった。この石をおおう状態で深鉢が倒伏しており、黄褐色砂粘土層の面に大木8A、B、阿玉台平行式と見られる土器が倒伏、横倒して散乱しその中心部と思われる個所は真赤な焼土塊が確認される。このような状態のために焼土、土器を取り去り始めて円形の竪穴ピットが見付けられる。各ピットともに細い木炭まじりの墨色土とともに骨片が含まれており、竪穴状態より屈葬が行なわれたことが明らかで、当時集落が近くにあり埋葬場所として定まっていたものであろう。遺骸を葬った上に載せたと思われる花崗岩は遺跡附近なく、東方2km以上の阿武隈川岸に求めるほなく、四角部の加工物で遺骸埋葬上に石をのせ、鉢、壺を伏せたものか、一つの竪穴は単独埋葬と見てよく、複合の状態や擾乱の形跡は認められておらなかった。これらの埋葬竪穴の上部に靈魂の鎮めのために祭祀儀式が盛んに焚火とともにに行なわれたのである。Dトレンチは焼土周囲に各種土器があたかも使われたままのような状態で擾乱の痕跡もなく出土した。なかでも口縁部直径68.6cmにおよぶ浅鉢が伏せたままの姿であり、三角型の土製品、土偶が一部を破壊された状態でともに出土した。竪穴内の黒色土、骨片の件出土器は、

- A ..... 大木8B 三角墻立体土製品
- C ..... 大木8A、B 阿玉台平行式土器
- D ..... 大木8A、B 土偶、三角土製品

の各種があり、敷石、列石の遺構は認めることができなかつたが、相当長期間にわたった墓群遺跡で、今回の発掘は縄文中期の古代人の信仰、埋葬、伴出した土器による時期、時代の集落構成人員、居住地の諸問題の解明が提起された。墓広の配置は大体同一線上に列んでおり、同一氏族の埋葬地であったろう。

当遺跡はその後後期、晚期への間連が維続している。社会的変化、経済的変化が天災、人為の問題からかこの台地を去っており、各種遺跡地がその後は当遺跡台地の周辺に散布しておるのである。

なお、当遺跡周辺には縄文後期以降、弥生、古墳、土師、須恵の各時期の文化を残して古代より歴史の時代にいたる。集落発展の跡を示しており、当遺跡の発掘を機会に学術的調査の行なわれたことのない、そして縄文中期の墓群の精査を行ない、古代の信仰、埋葬、祭祀、呪術の点を調査し東北地方南部の内陸部の墓群調査が日本考古学界に益する所大なるものがあると信ずる。

以上述べたが、当遺跡の持つ大きな意義の考察が不明瞭、不充分に終ったが、現段階においては止むを得ない点を諒とされて報告とする。

トレンチ



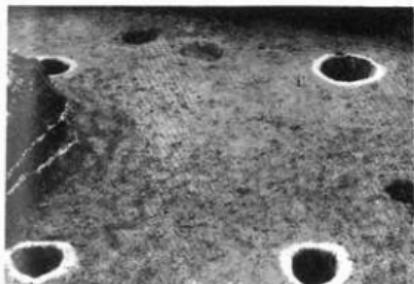
A トレンチ



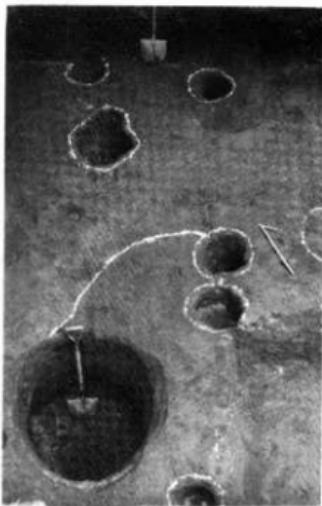
B トレンチ



C トレンチ 2 ピット



D トレンチ 下層の柱穴出土状況

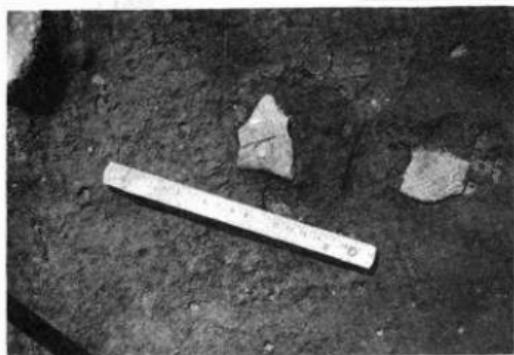


A' トレンチ、ピット

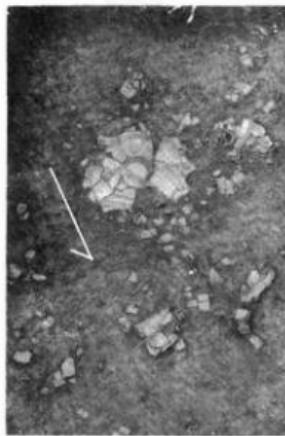
## 出 土 状 況



A トレンチ、A' ピットの  
三角塊立体土製品出土状況



D トレンチ、土偶、出土状況



D トレンチ上層土器の出土状況



C トレンチ、C-1 ピットの浅鉢・椀・壺の出土状況

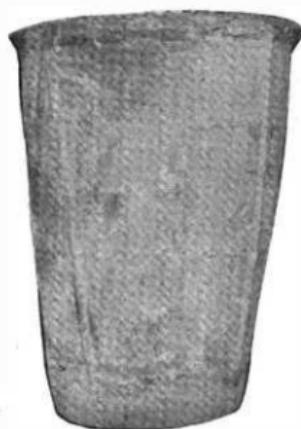
図 版



(1)



(2)



(3)



(4)

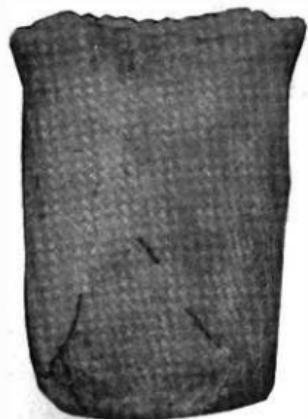


(5)

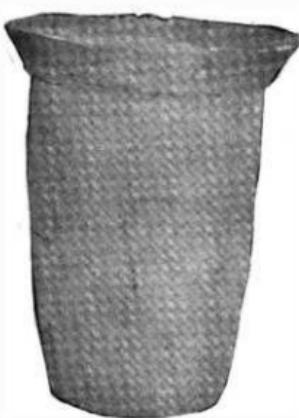


(6)

図 版



(7)



(9)

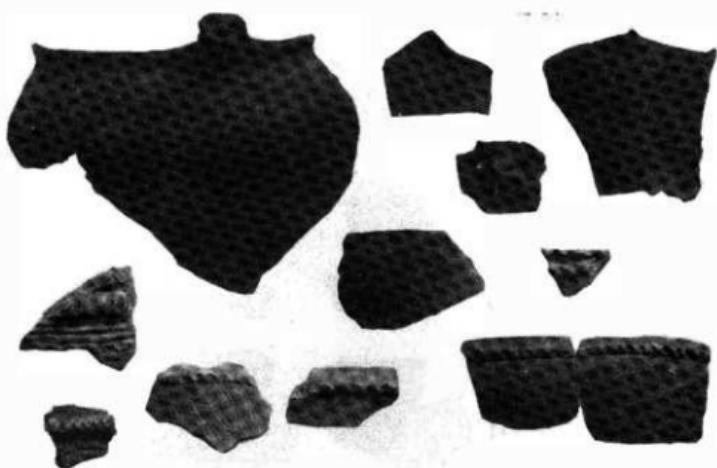


(8)

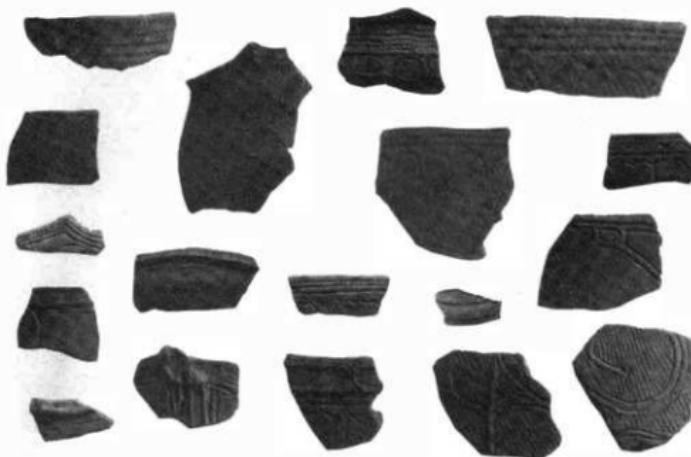


A トレンチ

1 図



2 図



3 図



新国西新氏所藏品

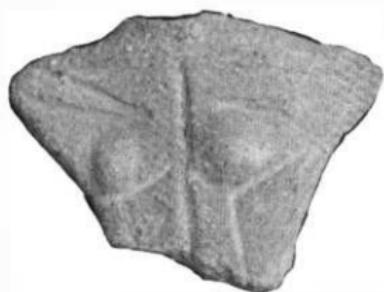


出土地 時期 右に同じ  
高さ 8寸余、最大径 6寸6分



安積郡富久山村久保田山王出土  
(山王神社附近)  
(大正15年耕地整理の際)  
高さ 3.8寸 最大径 3.05寸  
(岩越氏)

土 製 品 図 版



土 偶



土偶顔面

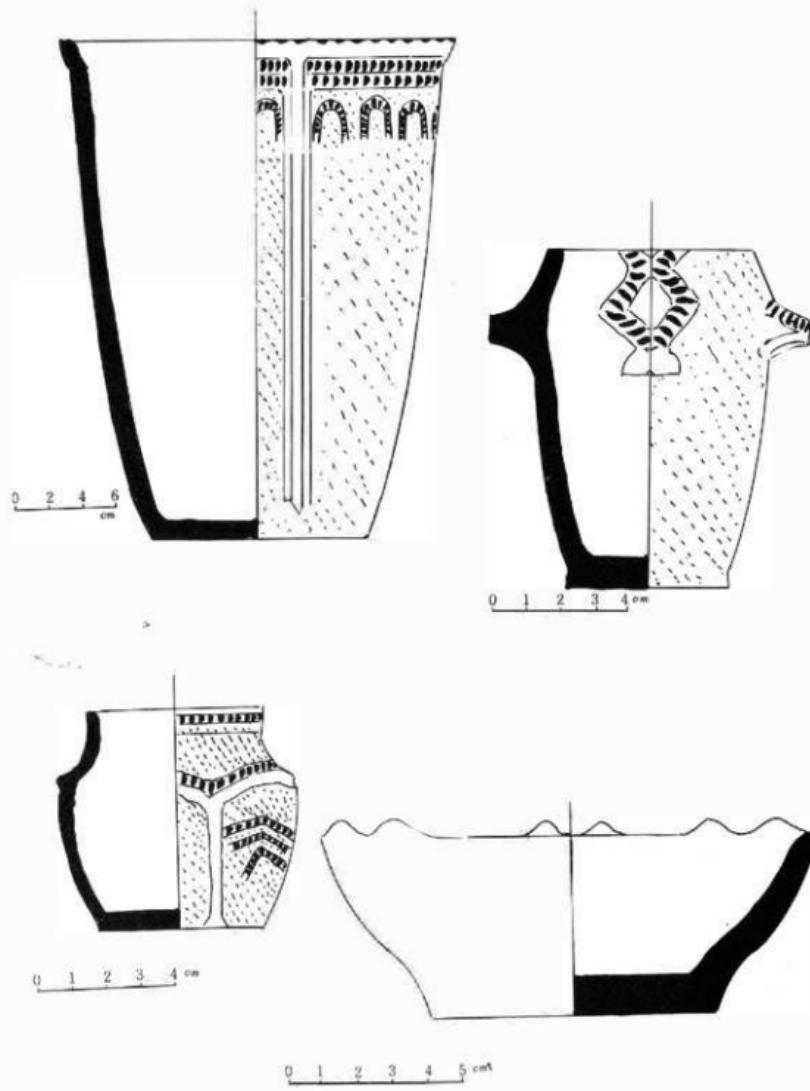


三角型土製品

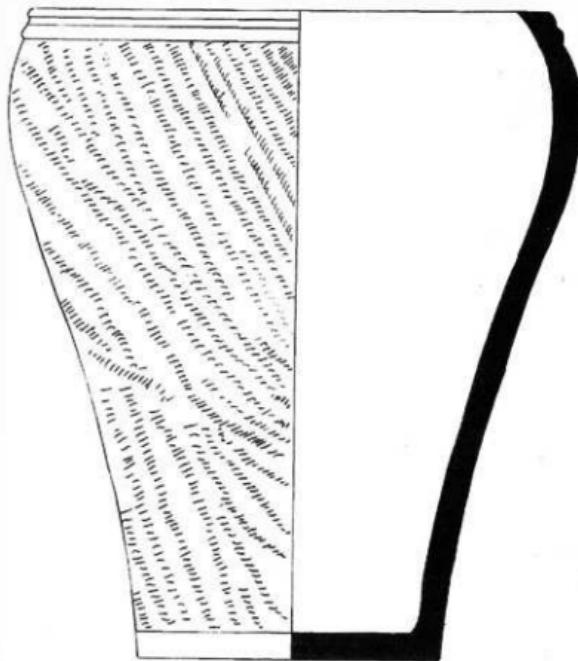
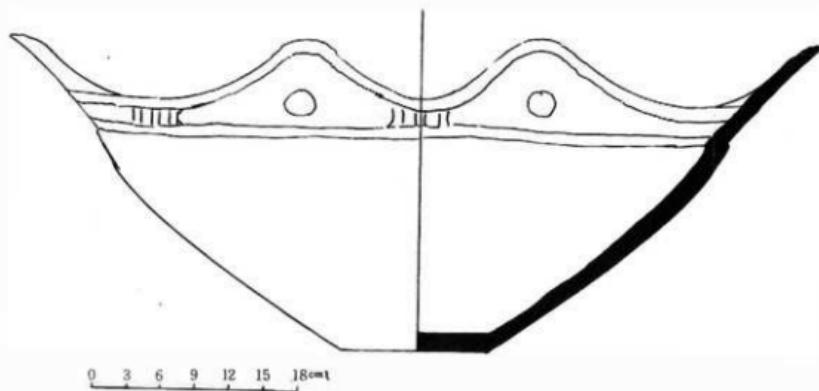


三角塊立体製品

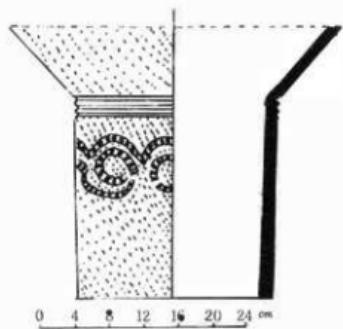
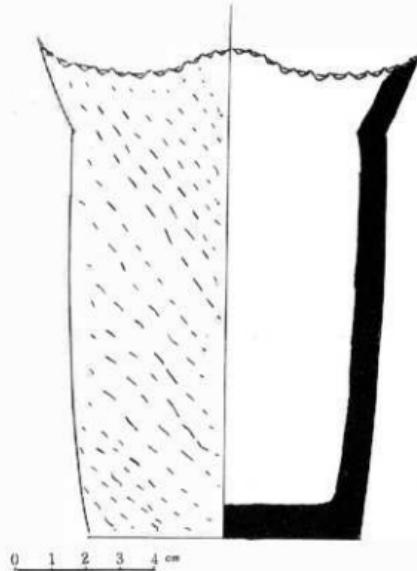
## 実測図 A



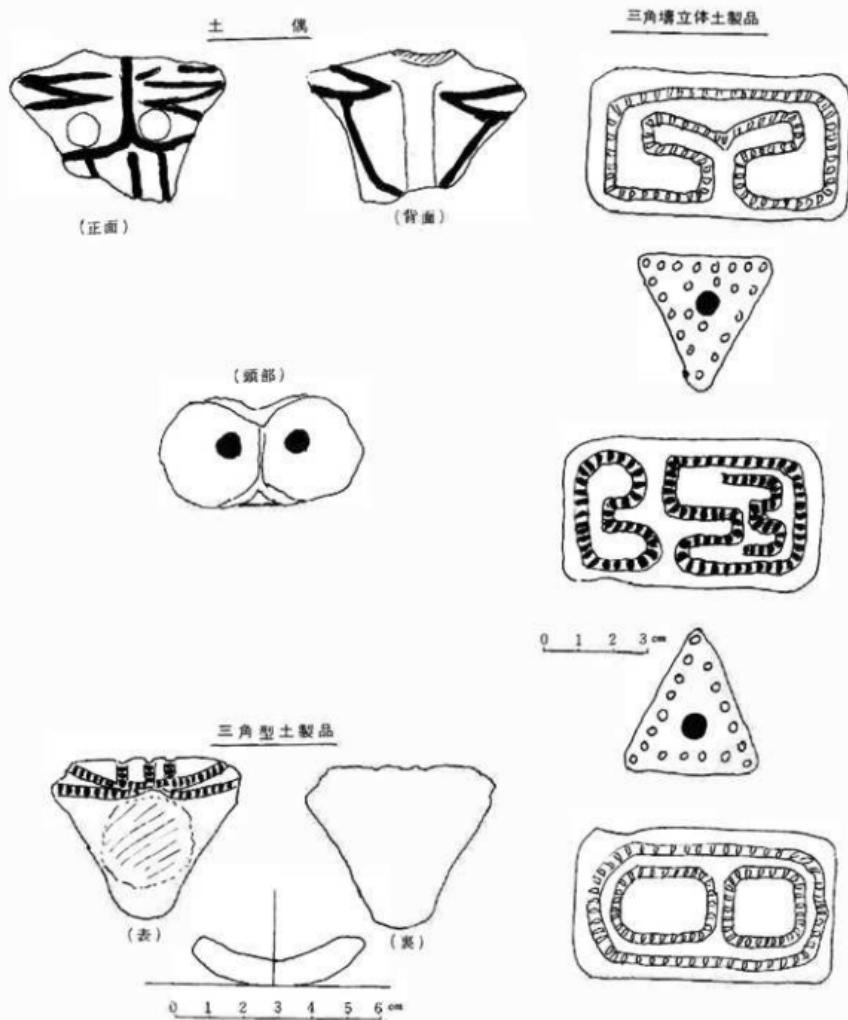
実測図 B



実測図 C



# 実測図 D



拓 本 1



拓 本 2



拓本 3



拓 本 4



---

昭和42年3月発行

新産業都市指定地区遺跡発掘調査

報告書

発行 福島県教育委員会

印刷 プロセス印刷  
福島市新町7番21号  
電話(02) 0445・4561

---